

有 価 証 券 報 告 書

事業年度 自 2018年1月1日
(第72期) 至 2018年12月31日

株式会社共和電業

有価証券報告書

- 1 本書は金融商品取引法第24条第1項に基づく有価証券報告書を、同法第27条の30の2に規定する開示用電子情報処理組織(EDINET)を使用し提出したデータに目次及び頁を付して出力・印刷したものであります。
- 2 本書には、上記の方法により提出した有価証券報告書に添付された監査報告書及び上記の有価証券報告書と併せて提出した内部統制報告書・確認書を末尾に綴じ込んでおります。

目 次

頁

第72期 有価証券報告書

【表紙】	1
第一部 【企業情報】	2
第1 【企業の概況】	2
1 【主要な経営指標等の推移】	2
2 【沿革】	4
3 【事業の内容】	5
4 【関係会社の状況】	6
5 【従業員の状況】	7
第2 【事業の状況】	8
1 【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】	8
2 【事業等のリスク】	9
3 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】	10
4 【経営上の重要な契約等】	13
5 【研究開発活動】	14
第3 【設備の状況】	15
1 【設備投資等の概要】	15
2 【主要な設備の状況】	15
3 【設備の新設、除却等の計画】	15
第4 【提出会社の状況】	16
1 【株式等の状況】	16
2 【自己株式の取得等の状況】	18
3 【配当政策】	19
4 【株価の推移】	20
5 【役員の状況】	21
6 【コーポレート・ガバナンスの状況等】	24
第5 【経理の状況】	32
1 【連結財務諸表等】	33
2 【財務諸表等】	59
第6 【提出会社の株式事務の概要】	73
第7 【提出会社の参考情報】	74
1 【提出会社の親会社等の情報】	74
2 【その他の参考情報】	74
第二部 【提出会社の保証会社等の情報】	75

監査報告書

内部統制報告書

確認書

【表紙】

【提出書類】 有価証券報告書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条第1項

【提出先】 関東財務局長

【提出日】 2019年3月28日

【事業年度】 第72期(自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)

【会社名】 株式会社共和電業

【英訳名】 KYOWA ELECTRONIC INSTRUMENTS CO., LTD.

【代表者の役職氏名】 代表取締役社長執行役員 田 中 義 一

【本店の所在の場所】 東京都調布市調布ヶ丘3丁目5番地1

【電話番号】 042(488)1111(大代表)

【事務連絡者氏名】 取締役執行役員経営管理本部長 五十嵐 卓 哉

【最寄りの連絡場所】 東京都調布市調布ヶ丘3丁目5番地1

【電話番号】 042(488)1111(大代表)

【事務連絡者氏名】 取締役執行役員経営管理本部長 五十嵐 卓 哉

【縦覧に供する場所】 株式会社東京証券取引所
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)

第一部 【企業情報】

第1 【企業の概況】

1 【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次	第68期	第69期	第70期	第71期	第72期
決算年月	2014年12月	2015年12月	2016年12月	2017年12月	2018年12月
売上高 (千円)	15,464,692	15,686,391	14,929,294	15,350,765	15,990,979
経常利益 (千円)	1,906,901	1,932,009	1,367,575	1,405,184	1,566,791
親会社株主に帰属する 当期純利益 (千円)	1,222,966	1,275,023	912,437	952,795	1,101,067
包括利益 (千円)	1,315,187	1,298,057	868,790	1,597,423	440,635
純資産額 (千円)	12,261,176	13,458,459	14,166,315	15,574,746	15,590,920
総資産額 (千円)	21,211,819	21,803,729	22,429,184	23,278,827	23,322,696
1株当たり純資産額 (円)	441.23	485.25	506.19	553.29	560.94
1株当たり当期純利益 (円)	44.14	45.95	32.92	34.12	39.35
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益 (円)	—	—	—	—	—
自己資本比率 (%)	57.8	61.4	62.8	66.6	66.5
自己資本利益率 (%)	10.6	9.9	6.6	6.4	7.1
株価収益率 (倍)	10.6	9.4	11.9	13.4	9.2
営業活動による キャッシュ・フロー (千円)	916,652	1,593,724	1,005,039	945,999	2,017,422
投資活動による キャッシュ・フロー (千円)	△630,351	△1,580,483	△837,335	△385,355	△349,916
財務活動による キャッシュ・フロー (千円)	353,077	△324,708	△119,732	△653,062	△851,104
現金及び現金同等物の 期末残高 (千円)	5,622,982	5,331,070	5,331,167	5,227,067	6,045,070
従業員数 (人)	781	798	824	836	839

(注) 1 売上高には、消費税及び地方消費税(以下消費税等)は含まれておりません。

2 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

(2) 提出会社の経営指標等

回次	第68期	第69期	第70期	第71期	第72期
決算年月	2014年12月	2015年12月	2016年12月	2017年12月	2018年12月
売上高 (千円)	15,055,423	15,203,659	14,594,390	14,550,042	14,980,980
経常利益 (千円)	1,389,433	1,565,760	929,757	1,199,597	1,216,732
当期純利益 (千円)	953,295	1,133,649	712,737	916,583	949,978
資本金 (発行済株式総数) (千円) (株)	1,723,992 (28,058,800)	1,723,992 (28,058,800)	1,723,992 (28,058,800)	1,723,992 (28,058,800)	1,723,992 (28,058,800)
純資産額 (千円)	9,954,195	10,926,333	11,494,689	12,742,833	12,843,417
総資産額 (千円)	18,720,672	19,327,571	19,698,475	20,438,268	20,110,515
1株当たり純資産額 (円)	358.21	395.76	412.94	454.92	464.47
1株当たり配当額 (内1株当たり中間配当額) (円)	10 (—)	10 (—)	10 (—)	10 (—)	12 (—)
1株当たり当期純利益 (円)	34.41	40.85	25.71	32.82	33.95
潜在株式調整後1株当たり当期純利益 (円)	—	—	—	—	—
自己資本比率 (%)	53.2	56.5	58.4	62.3	63.9
自己資本利益率 (%)	10.0	10.9	6.4	7.6	7.4
株価収益率 (倍)	13.6	10.6	15.2	14.0	10.7
配当性向 (%)	29.1	24.5	38.9	30.5	35.3
従業員数 (外、平均臨時雇用者数) (人)	463 (50)	473 (—)	498 (—)	500 (—)	477 (—)

(注) 1 売上高には、消費税及び地方消費税(以下消費税等)は含まれておりません。

2 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

3 第69期、第70期、第71期及び第72期の平均臨時雇用者数は、その総数が従業員数の100分の10未満であるため、記載を省略しております。

2 【沿革】

年月	沿革
1949年6月	東京都新宿区に無線通信機器とその測定器類の製造販売を目的として、株式会社共和無線研究所(資本金200千円)を設立。
1951年9月	東京都目黒区に本社工場、千代田区に営業所をそれぞれ開設。
1954年9月	本社所在地を東京都港区に移転。
1961年10月	社名を株式会社共和電業と変更。
1962年1月	東京都調布市に工場(調布工場)を新設。
1966年10月	調布工場本社社屋を新設、本社機構を現在地に移管。
1969年8月	東京証券取引所市場第二部へ株式上場。
1973年10月	製造子会社「株式会社山形共和電業」を設立。
1977年1月	株式会社共和電業と小糸工業株式会社の出資で「道路計装株式会社」を設立。
1981年1月	コンサルティング子会社株式会社共和計測工事(現「株式会社共和計測」)を設立。
1983年6月	株式会社共和計測の全額出資により株式会社共電商事(現「株式会社共和ハイテック」)を設立。
1985年12月	本社所在地に技術棟を新設。
1986年5月	製造子会社「株式会社甲府共和電業」を設立。
1987年1月	コンサルティング子会社株式会社関西共和計測(現「株式会社ニューテック」)を設立。
1995年1月	修理および保守業務子会社「株式会社共和サービスセンター」を設立。
1995年11月	「三幸電気株式会社」(当社代理店)の創業者より株式を譲り受け、当社の子会社となる。
1995年12月	株式会社共和計測より株式会社共和ハイテックの全株式を譲り受ける。
2000年6月	東京証券取引所市場第一部に指定。
2000年9月	山形県東根市に新工場を新設。
2005年8月	「道路計装株式会社」の株式を一部売却し、持分法適用関連会社となる。
2007年1月	販売子会社「三幸電気株式会社」の吸収合併を行う。
2008年12月	持分法適用関連会社「道路計装株式会社」が解散決議を行う。
2009年4月	持分法適用関連会社「道路計装株式会社」が清算終了する。
2010年10月	中国に販売子会社「共和電業(上海)貿易有限公司」を設立。
2012年12月	アメリカに販売子会社「KYOWA AMERICAS INC.」を設立。
2013年8月	マレーシアに販売子会社「KYOWA DENGYO MALAYSIA SDN. BHD.」を設立。
2013年12月	公募増資および第三者割当増資により、資本金1,723,992千円となる。
2014年1月	タイの関連会社「KYOWA DENGYO (THAILAND) CO., LTD.」に追加出資し、当社の子会社となる。
2017年3月	タマヤ計測システム株式会社の株式を取得し、子会社化する。
2018年12月	販売子会社「KYOWA DENGYO MALAYSIA SDN. BHD.」が清算終了する。

3 【事業の内容】

当社グループ(当社および当社の関係会社)は、当連結会計年度末日において、当社および子会社10社で構成されており、計測機器の製造販売、その機器に関連したコンサルティングおよび保守・修理と計測にかかわる一連の事業を展開しております。各関係会社の当該事業に係る位置づけは、次のとおりであります。なお、下記区分は、報告セグメントと同一であります。

(1) 計測機器

製造子会社の(株)山形共和電業、(株)甲府共和電業、(株)共和ハイテック、タマヤ計測システム(株)から購入した物品を当社が加工し、販売しております。なお、タマヤ計測システム(株)につきましては、一部直接外部へ販売しております。

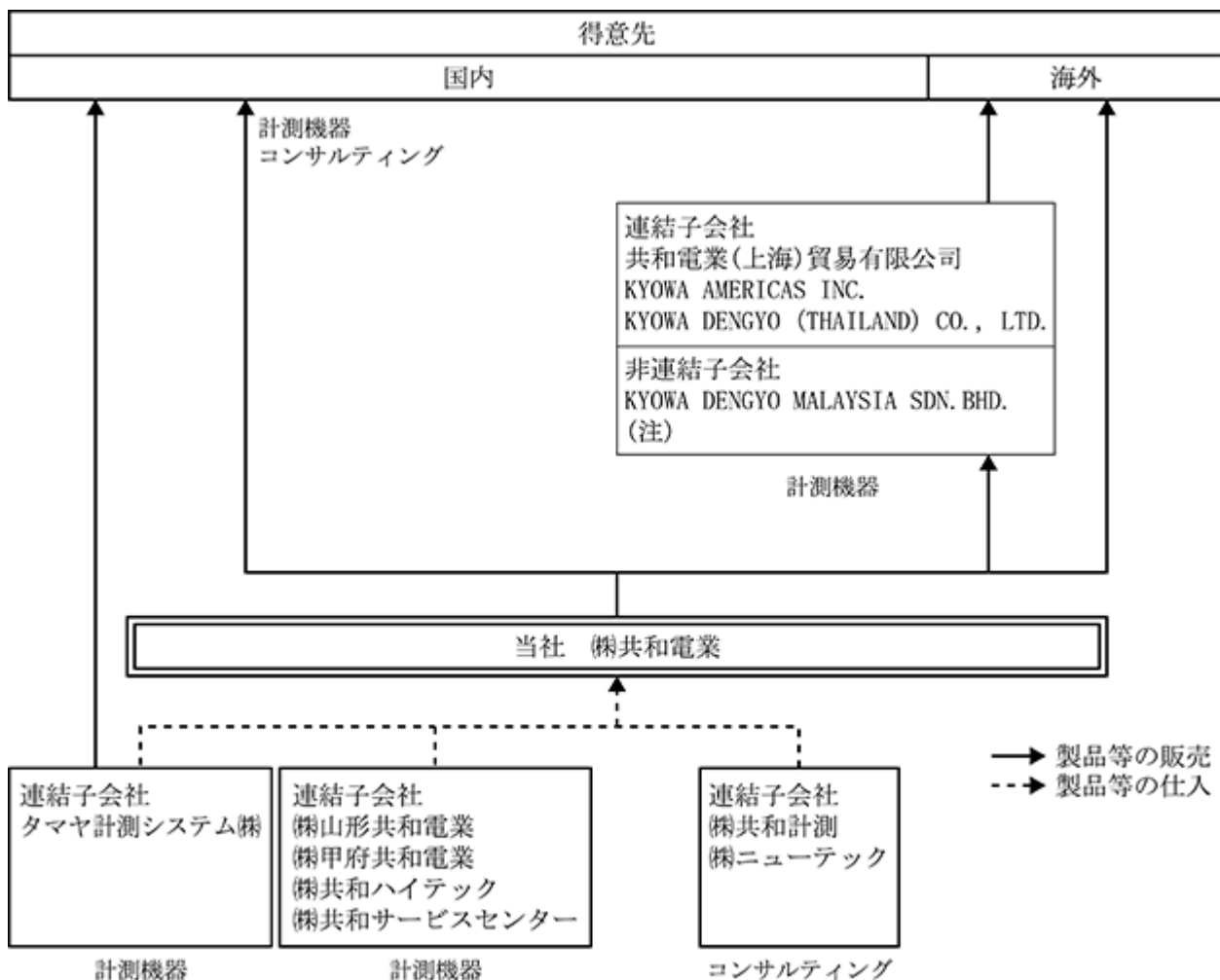
販売子会社の共和電業(上海)貿易有限公司が中国市場へ、KYOWA AMERICAS INC. がアメリカ市場へ、KYOWA DENGYO (THAILAND) CO., LTD. がタイ市場へ、KYOWA DENGYO MALAYSIA SDN. BHD. がマレーシア市場へ当社製品を販売しております。なお、KYOWA DENGYO MALAYSIA SDN. BHD. は2018年12月20日に清算終了しております。

(株)共和サービスセンターが当社製品の修理および保守業務を行い、販売は当社が行っております。

(2) コンサルティング

製品の設置、測定および解析等の役務の提供を行っており、主に(株)共和計測が関東地区を、(株)ニューテックが関西地区以西を担当しております。販売は当社が行っております。

事業の系統図は以下のとおりであります。



(注) 2018年12月20日に清算終了しております。

4 【関係会社の状況】

会社名	住所	資本金又は出資金 (千円)	事業の内容	議決権の 所有割合 (%)	関係内容				
					役員の兼任		資金援助 (千円)	営業上の取引	設備の賃貸借
					当社役員 (人)	当社職員 (人)			
(連結子会社) ㈱山形共和電業 (注) 3	山形県 東根市	100,000	計測機器	100	1	3	—	当社製品の製造	当社の土地、建物および生産設備を賃貸しております。
㈱共和計測	東京都 調布市	20,000	コンサルティング	100	1	3	—	測定器の取付、計測	当社社屋の一部を事業所として賃貸しております。
㈱ニューテック	兵庫県 加古郡 播磨町	20,000	コンサルティング	100	1	1	20,000	測定器の取付、計測	—
㈱甲府共和電業 (注) 3	山梨県 中巨摩郡 昭和町	20,000	計測機器	100	2	3	100,000	当社製品の製造	—
㈱共和ハイテック	東京都 調布市	10,000	計測機器	100	1	3	—	当社製品の設計、ソフトウェアの製作	当社社屋の一部を事業所として賃貸しております。
㈱共和サービスセンター	東京都 調布市	30,000	計測機器	100	—	3	—	当社製品の修理	〃
タマヤ計測システム㈱	東京都 品川区	50,000	計測機器	100	2	1	70,000	当社製品の製造	—
共和電業(上海)貿易有限公司	中国 上海市	50,000	計測機器	100	2	1	—	当社製品の販売	—
KYOWA AMERICAS INC.	米国 ミシガン州	34,632	計測機器	100	2	1	—	当社製品の販売	—
KYOWA DENGYO (THAILAND) CO., LTD. (注) 4	タイ国 バンコク	6,400	計測機器	49	2	—	—	当社製品の販売	—

- (注) 1 「事業の内容」欄には、セグメント情報に記載された名称を記載しております。
 2 上記関係会社は有価証券届出書または有価証券報告書を提出しておりません。
 3 ㈱山形共和電業および㈱甲府共和電業は特定子会社に該当いたします。
 4 持分は100分の50以下であります。が、実質的に支配しているため子会社としております。

5 【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

2018年12月31日現在

セグメントの名称	従業員数(人)
計測機器	520
コンサルティング	55
全社(共通)	264
合計	839

- (注) 1 従業員数は就業人員であります。
2 全社(共通)には管理部門および営業部門を含めて記載しております。

(2) 提出会社の状況

2018年12月31日現在

従業員数(人)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(千円)
477	40.4	16.2	6,763

セグメントの名称	従業員数(人)
計測機器	245
コンサルティング	13
全社(共通)	219
合計	477

- (注) 1 従業員数は就業人員であります。
2 平均年間給与は、基準外賃金および賞与が含まれております。
3 全社(共通)には管理部門および営業部門を含めて記載しております。

(3) 労働組合の状況

当社の労働組合は、JAM共和電業労働組合と称し、上部団体のJAMに加盟しております。2018年12月31日現在の組合員数は214名であり、労使関係は極めて安定しております。

第2 【事業の状況】

1 【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において、当社グループが判断したものであります。

(1) 経営の基本方針

当社グループは、「計測と制御を通じて“安全と安心”の提供で社会に貢献する“技術創造企業”」を企業理念とし、顧客、株主、取引先、従業員など全てのステークホルダーとの良好な信頼関係を保ちながら、高品質・高機能な製品の提供と計測コンサルティング・サービスを通じて社会の発展に貢献できる企業を目指しております。また、企業の成長に向けて「新たな市場への挑戦と事業基盤の強化により、応力計測のリーディングカンパニーを目指す」を企業ビジョンに掲げ、長年培った当社の計測技術を活かして、新たな事業領域の拡大とグローバルビジネスの拡充を図るとともに、これら成長戦略の実現のためにIT技術の活用やグループを通じた品質向上と業務の効率化に努めてまいります。

(2) 経営環境、対処すべき課題および中長期的な経営戦略

当社グループを取り巻く経営環境は、国内の実験研究分野向け計測器市場が成熟する一方でニーズは多様化し、幅広い顧客層を抱えるも個々の提案力に課題があり、グローバル化推進についても販売体制の強化と製品のローカライズ化等対応すべき課題があります。これらの課題解決に加え、インフラ構造物に対する一層の安全意識への高まりや老朽化への維持管理等、当社グループが貢献できる領域は拡大している状況を当社グループの成長の機会ととらえ、更なる企業価値向上を目指せると判断しております。

このような事業環境のなか、当社グループは「共和電業グループの未来を役職員一人一人が自ら創り出す」をコンセプトとした第6次中期経営計画「Create Future 2021」を策定いたしました。「Create Future 2021」では、「既存領域強化による売上拡大と顧客付加価値拡大に向けた管理体制の高度化により安定的に収益を伸長させつつ、注力領域(海外・新市場)の成長体制を構築する」を方針とし、3つの基本戦略「既存領域の強化」「注力領域での成長」「顧客への付加価値拡大」を軸に取り組んでまいります。

「既存領域の強化」

自動車、鉄道、道路関連分野といった、お客様の分野ごとに開発・販売・マーケティングの各部門が協働して取り組む体制を構築し、顧客対応力の強化により市場拡大を推進いたします。

「注力領域での成長」

海外市場では、現地法人子会社の営業力強化、海外販売店との関係強化をはかることで拡販活動に努めるとともに、当社ローカライズ化の推進により、地域に適合した製品の提供に取り組んでまいります。

新市場では、次期の成長エンジンとなりうる商品を創出するため、市場リサーチや開発体制に関する整備を進めてまいります。合わせて、市場投入済製品の需要拡大に取り組んでまいります。

「顧客への付加価値拡大」

全ての業務プロセスにおいてQCDの改善を加速することで、製品の信頼性、価格競争力、調達のしやすさといった利便性の向上をはかることで、「お客様にとって価値のある企業」となるよう努めてまいります。

(3) 目標とする経営指標

安定的な収益確保による財務体質の強化を優先課題として、目標とする経営指標を売上高営業利益率およびROEと定め、「Create Future 2021」においては最終年度である2021年度に売上高営業利益率10%以上およびROE 8%以上の達成を目標とし、継続的な成長軌道に乗せることを目指しております。

「Create Future 2021」の主な計数目標は下表のとおりです。

(単位：百万円)	2018年12月期実績	2019年12月期計画	2021年12月期目標
売上高	15,990	16,600	17,500
国内売上高	14,043	14,640	15,150
海外売上高	1,947	1,960	2,350
営業利益	1,525	1,550	1,870
営業利益率(%)	9.5%	9.3%	10.7%
親会社株主に帰属する当期純利益	1,101	1,120	1,350
ROE(%)	7.1%	7.4%	8.0%

2 【事業等のリスク】

当社グループの経営成績及び財務状態等に関する事項のうち、投資家の判断に重要な影響を及ぼす可能性のある事項は以下の通りであります。

なお、文中における将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

①市場リスク

当社グループはその製品・サービスを、官公庁、大学の研究部門をはじめ、自動車、電気機器、一般機械、鉄鋼等の幅広い分野にわたって販売しており、比較的安定した需要を確保しておりますが、主要市場である国内の経済環境や設備投資の動向が大幅に悪化した場合には、製品受注の減少、在庫の陳腐化等により、業績に影響を及ぼす可能性があります。また、当社グループは事業の海外展開を進めており、海外売上高は今後拡大していくものと考えております。よって、海外売上高の増加に伴い、海外各国の経済環境や為替相場の変動、法的規制の変更等が業績に影響を及ぼす可能性があります。

②技術開発リスク

当社グループは、ひずみゲージをコアスキルとして各種のセンサ関連機器、測定器関連機器を研究開発し、応力測定分野の幅広い顧客ニーズに対応できるところに特徴があります。しかしながら、産業を下支えする計測機器業界の技術進歩は目覚しく、応力測定分野の総合メーカーとして広範囲に技術優位を確保することは困難となる場合があります。

技術部門へ経営資源を優先的に投入し、常に技術動向に注意を払い、技術開発・製品開発に取り組んでおりますが、急激な技術進歩や予期しない代替技術の出現により、需要が低下し、業績に影響を及ぼす可能性があります。

③競争リスク

当社グループは、応力計測に関する長い経験とノウハウ及び高いスキルを持つ技能者によって、高品質・高性能な製品を市場へ送り出しておりますが、中国をはじめとする東・東南アジア諸国の品質・技能の向上は目覚しく、今後品質面での競争力を失った場合に、これら諸国の賃金格差と相俟って一部製品の価格競争が激化し、業績に影響を及ぼす可能性があります。

④人材リスク

当社グループの製品は、各種の生産設備及び試験設備を利用し、定められた製造手順を順守し生産されておりますが、多品種少量生産のため一部労働集約的な生産形態もあり、技能者のスキルに負う部分は少なくありません。熟練技能者の高齢化や退職に備え、伝承スキルを顕在化させ、後継者の計画的育成に努めておりますが、これらの問題に対応できない場合は、業績に影響を及ぼす可能性があります。

⑤調達リスク

昨今に見られる鋼材、原油等の資源価格の乱高下により、今後、調達環境が更に悪化した場合は、当社グループの生産活動に影響を受ける可能性があります。

また、当社グループの製造工程の一部は外注先に依存しており、生産活動に支障をきたすことのないよう生産管理及び品質管理面において適切な指導を実施しておりますが、外注先およびその仕入先の倒産等が発生した場合は、生産活動に影響を及ぼす可能性があります。

⑥品質リスク

当社グループは、品質システムの国際規格であるISO9000シリーズが要求する品質管理基準に従って各種の製品を製造しております。全ての製品および商品について欠陥が発生しないよう品質管理を行っておりますが、予期せぬ事情によりリコール等が発生した場合は、信頼性を毀損し、業績に影響を及ぼす可能性があります。

また、万一に備え、製造物責任賠償については保険に加入しておりますが、この保険により最終的に負担する賠償額が全額カバーされる保証はありません。

⑦売掛債権管理におけるリスク

当社グループは、取引先の財務諸表等を基に与信枠を設定し与信管理を行っておりますが、取引先の急激な財務状態の悪化等により不良債権が発生し、業績に影響を与える可能性があります。

⑧資産の保有リスク

当社グループは、有価証券等の金融資産を保有しているため、時価の変動により、業績に影響を及ぼす可能性があります。また、当社グループが保有する工場設備等の固定資産は、今後収益性の低下や時価の変動により、業績に影響を与える可能性があります。

⑨自然災害等に関するリスク

当社グループの事業所および生産拠点は、大規模な地震、台風、洪水等の自然災害や火災等の突発的な事故の発生により重大な被害を受ける可能性があります。これらの結果、生産および出荷の遅延等により営業活動が影響を受けた場合、また破損した設備の復旧や修復等に多大な費用が発生した場合は、業績に影響を及ぼす可能性があります。

⑩情報セキュリティに関するリスク

当社グループは、取引先の情報や、当社の開発情報等の内部機密、当社事業に関連した重要な情報を保持しております。情報の保護・管理について情報セキュリティの対応策を策定し、取り組んでおります。しかしながら、不測の事故等により情報の流出等が発生した場合は、損害賠償請求や社会的信用の低下などによって、業績に影響を及ぼす可能性があります。

3 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

(1) 経営成績等の状況の概要

当連結会計年度における当社グループ（当社及び連結子会社）の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フロー（以下、「経営成績等」という。）の状況の概要は次のとおりであります。

① 財政状態及び経営成績の状況

当連結会計年度におけるわが国経済は、度重なる自然災害の影響を受けつつも、企業収益の向上および雇用環境の改善を背景に景気は緩やかな回復基調で推移いたしました。しかしながら、海外においては米中の貿易摩擦問題および欧州における政治・経済の不安定等により、徐々に各国経済に影響を及ぼす懸念が広がり先行き不透明感が高まりました。

計測機器業界におきましては、ユーザーの設備投資姿勢にバラつきはあるものの増加傾向でありましたが、年度後半以降減速感が見え始めました。

このような事業環境のなか、当社グループは成長軌道にのせ収益力の回復をはかることを目的とした重点施策に取り組んでまいりました。

当連結会計年度における受注高は、高速道路向け設置型車両重量計の大型案件の成約等により16,791百万円と前連結会計年度に比べ7.6%の増加となりました。また、売上高については、15,990百万円と前連結会計年度に比べ4.2%の増収となりました。

利益につきましては、販売費及び一般管理費の増加があったものの、売上高の増加および原価低減により、営業利益は1,525百万円と前連結会計年度に比べ14.8%の増益となりました。また、経常利益は1,566百万円と前連結会計年度に比べ11.5%、親会社株主に帰属する当期純利益は1,101百万円と前連結会計年度に比べ15.6%とそれぞれ増益となりました。

セグメント別の経営成績は次のとおりであります。

(計測機器セグメント)

汎用品におけるセンサ関連機器は、一部のセンサ製品が競合激化により減少し、売上高は4,926百万円と前連結会計年度に比べ3.1%の減収となりました。また、測定器関連機器についても、全般的に低調であったため、売上高は2,114百万円と前連結会計年度に比べ1.5%の減収となりました。

特注品関連機器(特定顧客向け製品)は、高速道路向け設置型車両重量計の大型案件が竣工したこと等により、売上高は2,904百万円と前連結会計年度に比べ13.1%の増収となりました。

システム製品関連機器は、自動車安全分野が堅調に推移したほか、鉄道および車両等の交通関連製品の増加等により、売上高は2,210百万円と前連結会計年度に比べ9.4%の増収となりました。

保守・修理関連は、機器修理が堅調に推移し、売上高は1,044百万円と前連結会計年度に比べ2.9%の増収となりました。

以上その他を含め、計測機器セグメントは、売上高は14,768百万円と前連結会計年度に比べ3.9%の増収となりました。また、セグメント利益(売上総利益)は5,518百万円と前連結会計年度に比べ5.5%の増益となりました。

(コンサルティングセグメント)

コンサルティングセグメントは、鉄道および道路等の構造物への計測委託業務等が増加し、売上高は1,222百万円と前連結会計年度に比べ7.2%の増収となりました。また、セグメント利益(売上総利益)は454百万円と前連結会計年度に比べ15.5%の増益となりました。

(資産の部)

当連結会計年度末の資産合計は23,322百万円となり、前連結会計年度末に比べ43百万円の増加となりました。

流動資産は16,373百万円と、前連結会計年度末に比べ411百万円の増加となりました。その主な要因は、たな卸資

産が436百万円減少した一方で、現金及び預金が311百万円、有価証券が500百万円増加したことによるものであります。

固定資産は6,949百万円と、前連結会計年度末に比べ367百万円の減少となりました。その主な要因は、退職給付に係る資産が279百万円増加した一方で、投資有価証券が628百万円減少したことによるものであります。

(負債の部)

当連結会計年度末の負債合計は7,731百万円と、前連結会計年度末に比べ27百万円の増加となりました。

流動負債は5,408百万円と、前連結会計年度末に比べ86百万円の増加となりました。その主な要因は、支払手形及び買掛金が110百万円減少した一方で、1年内返済予定の長期借入金が186百万円増加したことによるものであります。

固定負債は2,323百万円と、前連結会計年度末に比べ59百万円の減少となりました。その主な要因は、退職給付に係る負債が425百万円増加した一方で、長期借入金が490百万円減少したことによるものであります。

(純資産の部)

当連結会計年度末の純資産合計は15,590百万円と、前連結会計年度末に比べ16百万円の増加となりました。その主な要因は、利益剰余金の増加820百万円と自己株式取得による減少144百万円で株主資本が676百万円増加した一方で、その他の包括利益累計額が663百万円減少したことによるものであります。

② キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度の現金及び現金同等物は、6,045百万円と前連結会計年度末に比べ818百万円の増加となりました。

(営業活動によるキャッシュ・フロー)

当連結会計年度の営業活動によるキャッシュ・フローは、税金等調整前当期純利益1,566百万円に加え減価償却費644百万円、たな卸資産の減少435百万円等の資金流入となりました。一方、仕入債務の減少105百万円、法人税等の支払414百万円等の資金流出がありました。その結果、全体では2,017百万円の資金流入となり、前連結会計年度に比べ1,071百万円の増加(113.3%)となりました。

(投資活動によるキャッシュ・フロー)

当連結会計年度の投資活動によるキャッシュ・フローは、有形固定資産の取得319百万円、無形固定資産の取得57百万円等により、全体では349百万円の資金流出となり、前連結会計年度に比べ35百万円の支出の減少(△9.2%)となりました。

(財務活動によるキャッシュ・フロー)

当連結会計年度の財務活動によるキャッシュ・フローは、長期借入金の返済303百万円、配当金の支払279百万円、自己株式の取得144百万円等の資金流出がありました。その結果、全体では851百万円の資金流出となり、前連結会計年度末に比べ198百万円の支出の増加(30.3%)となりました。

③ 生産、受注及び販売の状況

a. 生産実績

当連結会計年度における生産実績は、次のとおりであります。

セグメントの名称	金額(千円)	前年同期比(%)
計測機器	15,415,039	99.7

- (注) 1 金額は標準販売価格によっております。
2 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

b. 受注状況

当連結会計年度における受注状況は、次のとおりであります。

セグメントの名称	受注高(千円)	前年同期比(%)	受注残高(千円)	前年同期比(%)
計測機器	15,574,973	108.8	4,075,610	124.7
コンサルティング	1,216,284	94.5	350,691	98.2
合計	16,791,257	107.6	4,426,301	122.1

- (注) 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

c. 販売実績

当連結会計年度における販売実績は、次のとおりであります。

セグメントの名称	金額(千円)	前年同期比(%)
計測機器	14,768,098	103.9
コンサルティング	1,222,881	107.2
合計	15,990,979	104.2

- (注) 1 最近2連結会計年度の主な相手先別の販売実績および当該販売実績に対する割合は、当該割合が100分の10未満のため記載を省略しております。
2 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

(2) 経営者の視点による経営成績等の状況に関する分析・検討内容

経営者の視点による当社グループの経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容は次のとおりであります。なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度において判断したものであります。

① 重要な会計方針および見積り

当社グループの連結財務諸表は、わが国において一般に公正妥当と認められている会計基準に基づき作成されております。連結財務諸表作成にあたっては貸倒引当金、退職給付に係る負債等の計上について見積計算を行っており、その概要については「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」に記載しております。また、繰延税金資産においては、将来の回収可能性を充分検討の上、計上しております。

② 当連結会計年度の経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容

当連結会計年度において当社グループは売上高16,200百万円、営業利益1,360百万円、経常利益1,420百万円、親会社株主に帰属する当期純利益970百万円を目標に掲げ、業績予想の達成に注力してまいりました。外部環境につきましては、国内では雇用環境の改善、設備投資意欲の高まり等に支えられ、景気は引き続き順調に推移してまいりましたが、年度後半以降減速感が見え始めました。海外においても米中の貿易摩擦問題や英国のEU離脱問題等の不安定材料により徐々に各国経済への影響が広がりました。

このような事業環境のなか、当連結会計年度の経営成績は売上高15,990百万円、営業利益1,525百万円、経常利益1,566百万円、親会社株主に帰属する当期純利益は1,101百万円となりました。

売上高につきましては、高速道路向け設置型車両重量計の大型案件を始めとした特注品およびシステム品の売上増加が業績を牽引し前期を上回ることができましたが、加速度計や測定器等の汎用品が減少し年初予想を下回りました。利益につきましては、ひずみゲージ生産設備への投資がほぼ完了したことによる減価償却費負担の減少や固定費抑制効果が寄与し、前期および年初予想を上回る結果となりました。

今後もダム・道路・鉄道等のインフラの健全性管理への需要が増加すると見込んでおります。中でも鉄道分野において、走行中の異常を検知し安全な運行に寄与できるシステムの拡販に取り組んでまいります。また、無線方式を採用した各種計測器、産官学プロジェクトとの連携等、次世代の成長エンジンになりうる商品の創出に取り組んでまいります。

③ 経営成績に重要な影響を与える要因

当社グループの経営成績に重要な影響を与える要因につきましては、「2 事業等のリスク」に記載のとおりであります。

④ 資本の財源及び資金の流動性についての分析

当社グループの運転資金需要の主なものは、製品製造に関する材料等の購入費や営業費用であります。設備投資資金需要の主なものは生産機器、開発用機器、試験機および情報機器等に関する設備投資であります。運転資金需要および設備投資資金需要の財源につきましては、自己資金および金融機関からの借入等を基本としております。また、借入枠1,750百万円のコミットメントライン契約により資金調達の効率化および安定化をはかっております。

なお、当連結会計年度末における借入金およびリース債務を含む有利子負債の残高は2,366百万円となっております。また、当連結会計年度末における現金及び現金同等物の残高は6,045百万円となっております。

4 【経営上の重要な契約等】

該当事項はありません。

5 【研究開発活動】

当社グループは、「新たな市場への挑戦と事業基盤の強化により、応力計測のリーディングカンパニーを目指す」という企業ビジョンの実現に向けて、応力計測に軸足を置き、要素技術・製品技術および計測技術についての研究開発活動を行っております。

当社グループの研究開発活動は提出会社に集約されております。当連結会計年度における研究開発費は985百万円（対売上高比6.1%）であります。

セグメントごとの研究開発活動を示すと次のとおりであります。

(1) 計測機器

センサ開発部門では、センサに関する基礎研究、ひずみゲージ・ひずみゲージ式変換器の製品開発、計測機器開発部門では、測定器・データロガー・アナライザの製品開発、これらを組み合わせたシステム開発を行っており、市場ニーズに対応した製品開発を行い、タイムリーに市場へ投入しております。常に時代を先取りした新しいセンサ・計測機器の開発に取り組んでおります。

自動車関連計測機器では、ホイール6分力計測システムや自動車衝突試験計測機器をはじめとし、自動車の性能試験、安全性確認、乗り心地、居住性の調査などに関連するセンサ・システムの開発を顧客密着型で行っております。

道路・交通システム関連計測機器では、高速道路のETC化に伴い、本格的な動的軸重計測（WIM；weigh-in-motion）に対応すべく軸重計測の高速化対応を行っており、個別の顧客要望に応えると共に、システムの精度向上に取り組んでおります。

インフラ分野では、安全な施工管理のためのシステム開発および提案を行ってまいりました。今後も、当社の保有する技術をベースに安全な施工管理および大型設備の健全性監視のためのシステム開発を進めてまいります。

当社グループは、顧客に密着した効率的な開発体制と、次世代の製品に適応すべき先行技術の開発体制を構築し、組織強化を行っております。引き続き、グローバル化をキーワードにして、計測と制御に関する独自の情報・技術・ノウハウを活かした「安全と安心」を提供できる付加価値の高い製品開発を進めてまいります。当連結会計年度における研究開発費は985百万円であります。

(2) コンサルティング

特筆すべき研究開発活動はありません。

第3 【設備の状況】

1 【設備投資等の概要】

当連結会計年度の設備投資につきましては、生産合理化を目的として、全体で407百万円の設備投資を実施いたしました。

なお、セグメントごとの設備投資につきましては次のとおりであります。

(1) 計測機器セグメント

当連結会計年度の主な設備投資は、生産合理化を目的とした建物および機械装置等に357百万円の設備投資を実施いたしました。

(2) コンサルティングセグメント

当連結会計年度は重要な設備投資を実施しておりません。

(3) 全社(共通)

当連結会計年度の主な設備投資は、業務用設備の拡充等に48百万円の設備投資を実施いたしました。

2 【主要な設備の状況】

当社グループにおける主要な設備は、次のとおりです。

(1) 提出会社

2018年12月31日現在

事業所名 (所在地)	セグメント の名称	設備の内容	帳簿価額					従業員数 (人)
			建物 及び構築物 (千円)	機械装置 及び運搬具 (千円)	土地 (千円) (面積㎡)	その他 (千円)	合計 (千円)	
本社・工場 (東京都調布市)	計測機器および全社(共通)	生産設備 研究開発設備 その他設備	1,197,445	114,529	226,828 (6,638)	203,025	1,741,828	339
山形工場 (山形県東根市)	計測機器	生産設備 その他設備	1,200,342	508,841	457,284 (21,570)	27,673	2,194,142	—
東京営業所 ほか12営業所	全社 (営業部門)	その他設備	2,260	—	—	1,269	3,530	138

- (注) 1. 山形工場の設備の一部は、(株)山形共和電業に賃貸しております。
2. 帳簿価額のうち「その他」は、工具、器具及び備品およびリース資産の合計であります。

(2) 国内子会社

2018年12月31日現在

会社名	事業所名 (所在地)	セグメント の名称	設備の内容	帳簿価額					従業員数 (人)
				建物 及び構築物 (千円)	機械装置 及び運搬具 (千円)	土地 (千円) (面積㎡)	その他 (千円)	合計 (千円)	
(株)山形共和電業	本社・工場 (山形県東根市)	計測機器	生産設備 その他設備	126,312	28,936	383,938 (21,448)	9,657	548,845	198

- (注) 1. (株)山形共和電業の建物及び構築物、土地および生産設備の一部は、提出会社より賃借しております。
2. 帳簿価額のうち「その他」は、工具、器具及び備品およびリース資産の合計であります。

3 【設備の新設、除却等の計画】

当社グループの設備投資につきましては、提出会社を中心にグループとして重複投資とならないように提出会社が中心となって調整しております。

(1) 重要な設備の新設等

当連結会計年度末現在における重要な設備の新設等の計画はありません。

(2) 重要な設備の除却等

定期的な設備の更新のための除却等を除き、重要な設備の除却等の計画はありません。

第4 【提出会社の状況】

1 【株式等の状況】

(1) 【株式の総数等】

① 【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	99,570,000
計	99,570,000

② 【発行済株式】

種類	事業年度末現在 発行数(株) (2018年12月31日)	提出日現在 発行数(株) (2019年3月28日)	上場金融商品取引所 名又は登録認可金融 商品取引業協会名	内容
普通株式	28,058,800	28,058,800	東京証券取引所 (市場第一部)	単元株式数は100株であります。
計	28,058,800	28,058,800	—	—

(2) 【新株予約権等の状況】

① 【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

② 【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

③ 【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (株)	発行済株式 総数残高 (株)	資本金増減額 (千円)	資本金残高 (千円)	資本準備金 増減額 (千円)	資本準備金 残高 (千円)
2013年12月24日 (注1)	300,000	28,058,800	54,072	1,723,992	54,072	1,759,161

(注) 1 当社株式の売出し(オーバーアロットメントによる売出しに関連した第三者割当増資)

払込金額 360.48円

資本組入額 180.24円

割当先 大和証券(株)

(5) 【所有者別状況】

2018年12月31日現在

区分	株式の状況(1単元の株式数100株)								単元未満株式の状況(株)
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他	計	
					個人以外	個人			
株主数(人)	—	26	26	78	64	2	3,962	4,158	—
所有株式数(単元)	—	93,696	2,173	47,897	17,827	48	118,836	280,477	11,100
所有株式数の割合(%)	—	33.41	0.77	17.08	6.35	0.02	42.37	100.00	—

(注) 自己名義株式406,769株は、「個人その他」に4,067単元、「単元未満株式の状況」に69株含めて記載しております。

(6) 【大株主の状況】

2018年12月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数(千株)	発行済株式(自己株式を除く。)の総数に対する所有株式数の割合(%)
日本マスタートラスト信託銀行株式会社(信託口)	東京都港区浜松町2-11-3	2,732	9.87
共和電業従業員持株会	東京都調布市調布ケ丘3-5-1	2,027	7.33
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口)	東京都中央区晴海1-8-11	1,524	5.51
共和協栄会	東京都調布市調布ケ丘3-5-1	1,278	4.62
株式会社みずほ銀行	東京都千代田区大手町1-5-5	850	3.07
株式会社ニッカトー	大阪府堺市堺区遠里小野町3-2-24	814	2.94
株式会社チノー	東京都板橋区熊野町32-8	711	2.57
富国生命保険相互会社	東京都千代田区内幸町2-2-2	650	2.35
株式会社三菱UFJ銀行	東京都千代田区丸の内2-7-1	550	1.98
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口5)	東京都中央区晴海1-8-11	441	1.59
計	—	11,579	41.87

(注) 上記の所有株式数のうち、信託業務に係る株式数は、次のとおりであります。

日本マスタートラスト信託銀行株式会社(信託口)	2,732千株
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口)	1,524千株
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口5)	441千株

(7) 【議決権の状況】

① 【発行済株式】

2018年12月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	—	—	—
議決権制限株式(自己株式等)	—	—	—
議決権制限株式(その他)	—	—	—
完全議決権株式(自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 406,700	—	—
完全議決権株式(その他)	普通株式 27,641,000	276,410	—
単元未満株式	普通株式 11,100	—	—
発行済株式総数	28,058,800	—	—
総株主の議決権	—	276,410	—

(注) 「単元未満株式」欄の普通株式には、当社所有の自己株式69株が含まれております。

② 【自己株式等】

2018年12月31日現在

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義 所有株式数 (株)	他人名義 所有株式数 (株)	所有株式数 の合計 (株)	発行済株式 総数に対する 所有株式数 の割合(%)
株式会社共和電業	東京都調布市調布ヶ丘 3-5-1	406,700	—	406,700	1.45
計	—	406,700	—	406,700	1.45

2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第3号および会社法第155条第7号による普通株式の取得

(1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2) 【取締役会決議による取得の状況】

区分	株式数(株)	価額の総額(千円)
取締役会(2018年12月17日)での決議状況 (取得期間2018年12月18日～2018年12月18日)	400,000	160,800
当事業年度前における取得自己株式	—	—
当事業年度における取得自己株式	359,000	144,318
残存決議株式の総数及び価額の総額	41,000	16,482
当事業年度の末日現在の未行使割合(%)	10.25	10.25
当期間における取得自己株式	—	—
提出日現在の未行使割合(%)	10.25	10.25

(注) 東京証券取引所における自己株式立会外買付取引(ToSTNeT-3)による取得であります。

(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数(株)	価額の総数(千円)
当事業年度における取得自己株式	82	32
当期間における取得自己株式	—	—

(注) 当期間における取得自己株式には、2019年3月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式数は含めておりません。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数(株)	処分価額の総額(千円)	株式数(株)	処分価額の総額(千円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	—	—	—	—
消却の処分を行った取得自己株式	—	—	—	—
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	—	—	—	—
その他 (—)	—	—	—	—
保有自己株式数	406,769	—	406,769	—

(注) 当期間における取得自己株式には、2019年3月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式数は含めておりません。

3 【配当政策】

当社は、事業基盤強化および将来の事業展開に備えるための内部留保充実をはかるとともに、株主の皆様への安定的かつ業績を反映した適正な利益還元を行うことを基本的な配当政策といたしております。

当社は、期末に年1回、剰余金の配当を行うことを基本方針としており、剰余金の配当の決定機関は株主総会です。

当事業年度の配当につきましては、配当政策および当事業年度の業績を勘案し、1株当たり普通配当金12円の配当といたしました。

また、内部留保金につきましては、生産設備の増強、財務体質・コスト競争力の強化などに有効活用し、経営基盤のさらなる充実を目指してまいります。

なお、当事業年度に係る剰余金の配当は以下のとおりであります。

決議年月日	配当金の総額(千円)	1株当たり配当額(円)
2019年3月28日 定時株主総会決議	331,824	12

4 【株価の推移】

(1) 【最近5年間の事業年度別最高・最低株価】

回次	第68期	第69期	第70期	第71期	第72期
決算年月	2014年12月	2015年12月	2016年12月	2017年12月	2018年12月
最高(円)	630	535	431	487	470
最低(円)	375	404	306	390	328

(注) 最高・最低株価は、東京証券取引所(市場第一部)におけるものであります。

(2) 【最近6月間の月別最高・最低株価】

月別	2018年7月	8月	9月	10月	11月	12月
最高(円)	436	446	448	451	432	423
最低(円)	397	395	399	392	405	328

(注) 最高・最低株価は、東京証券取引所(市場第一部)におけるものであります。

5 【役員 の 状 況】

男性 9名 女性 一名 (役員のうち女性の比率 一%)

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
代表取締役 会長執行役員		舘 野 稔	1955年10月11日生	1978年4月 当社入社 2006年1月 技術本部特機部長 2008年1月 技術本部副本部長兼ユニット開 発部長兼先行開発部長 2009年3月 取締役技術本部副本部長 2010年2月 (株)共和サービスセンター代表取 締役社長 2012年3月 取締役技術本部長 2014年3月 常務取締役技術本部長 2015年3月 代表取締役社長 2016年3月 代表取締役社長執行役員 2019年3月 代表取締役会長執行役員(現)	(注) 4	28,000
代表取締役 社長執行役員		田 中 義 一	1957年3月27日生	1980年4月 当社入社 2005年1月 総務本部人事部長 2007年1月 経営管理本部副本部長兼人事部 長兼経営企画部長 2011年3月 取締役経営管理本部長 2012年12月 KYOWA AMERICAS INC. 取締役社長 2015年3月 常務取締役経営管理本部長 2016年2月 (株)山形共和電業代表取締役社長 2016年3月 常務取締役執行役員 2017年3月 専務取締役執行役員 2017年3月 共和電業(上海)貿易有限公司董 事長(現) 2019年3月 代表取締役社長執行役員(現)	(注) 4	44,600

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
常務取締役 執行役員	海外統括 本部長	齋藤 美雄	1959年3月27日生	1981年4月 当社入社 2007年1月 内部監査室長 2008年3月 監査役 2013年1月 海外統括本部長兼海外営業部長 2013年3月 取締役海外統括本部長 2014年1月 KYOWA DENGYO (THAILAND) CO., LTD. 取締役社長(現) 2016年3月 取締役執行役員海外統括本部長 2017年1月 KYOWA AMERICAS INC. 取締役社長(現) 2019年2月 岡山形共和電業代表取締役社長(現) 2019年3月 常務取締役執行役員海外統括本部長(現)	(注) 4	23,500
取締役 執行役員	経営管理 本部長	五十嵐 卓哉	1958年9月10日生	1981年4月 当社入社 2005年1月 営業本部販売推進部長 2009年1月 営業本部副本部長兼販売支援部長 2012年6月 営業戦略室副本部長 2014年3月 監査役 2016年2月 岡山府共和電業代表取締役社長(現) 2016年3月 取締役執行役員経営管理本部長(現) 2017年3月 タマヤ計測システム(株)代表取締役社長(現)	(注) 4	29,200
取締役 執行役員	営業本部長 (国内営業 統括)	庄野 誠一	1960年2月17日生	1982年4月 当社入社 2005年1月 営業本部西日本営業部長兼豊田営業所長 2009年1月 営業本部副本部長兼中日本営業部長 2010年8月 営業本部副本部長兼海外部長 2013年1月 東日本営業本部長代理 2014年3月 取締役東日本営業本部長 2016年1月 取締役営業本部長(国内営業統括) 2016年3月 取締役執行役員営業本部長(国内営業統括)(現)	(注) 4	20,200
取締役 執行役員	技術本部長	生沼 伸夫	1960年2月28日生	1982年4月 当社入社 2008年1月 技術本部自動車機器部長 2011年7月 技術本部副本部長 2015年3月 取締役技術本部長 2016年2月 岡山共和ハイテック代表取締役社長(現) 2016年3月 取締役執行役員技術本部長(現)	(注) 4	17,700
取締役 (常勤監査等 委員)		澤田 佳伸	1959年3月10日生	1981年4月 当社入社 2009年1月 経営管理本部人財開発部長 2012年1月 経営管理本部人事・総務部長 2015年1月 生産本部副本部長 2016年1月 品質管理本部副本部長 2017年1月 内部監査室長 2018年3月 取締役(監査等委員)(現)	(注) 5	26,900

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有持株数 (株)
取締役 (監査等 委員)		青 柳 裕 史	1953年12月27日生	1977年4月 ㈱富士銀行入行 2005年4月 みずほ信託銀行㈱執行役員IT・システム統括部長 2006年6月 同行常務執行役員IT・システム統括部長 2009年4月 みずほ信不動産販売㈱代表取締役副社長 2011年4月 ㈱みずほトラストシステムズ代表取締役社長 2012年3月 理研コランダム㈱取締役 2016年4月 ㈱みずほトラストシステムズ顧問 2017年3月 取締役(監査等委員)(現) 2017年6月 ヤマトクレジットファイナンス㈱監査役(現)	(注) 5	—
取締役 (監査等 委員)		和 田 敏	1953年7月19日生	1977年4月 ㈱山形銀行入行 2001年10月 同行米沢西支店長 2010年4月 同行監査部長 2011年7月 (一社)山形県銀行協会常務理事(現) 2019年3月 取締役(監査等委員)(現)	(注) 5	—
計						190,100

- (注) 1. 監査等委員である取締役青柳裕史および和田敏の両氏は、社外取締役であります。また両氏を株式会社東京証券取引所の定めに基づく独立役員として指定し、同取引所に届け出ております。
2. 当社の監査等委員会は、議長 澤田佳伸氏、委員 青柳裕史氏、委員 和田敏氏の3名で構成されております。
3. 当社は、監査等委員が法令に定める員数を欠くことになる場合に備え、会社法第329条第3項に定める補欠の監査等委員である取締役1名を選任しております。補欠の監査等委員である取締役の略歴は次のとおりであります。

氏名	生年月日	略歴	任期	所有持株数 (株)
木 村 眞 一	1945年9月3日生	1975年4月 東京弁護士会登録 高橋法律事務所入所 2004年3月 監査役	(注)	—

(注)補欠取締役の任期は、就任した時から退任した取締役の任期の満了の時までであります。

4. 取締役(監査等委員である取締役を除く。)の任期は2019年3月開催の定時株主総会から1年であります。
5. 監査等委員である取締役の任期は2018年3月開催の定時株主総会から2年であります。なお、和田敏氏の任期は、前任者の任期満了の時までとなるため、2019年3月開催の定時株主総会の終結の時から1年であります。
6. 当社は、変化の激しい経営環境において迅速かつ適切な意思決定を行うべく、執行役員制度を導入しております。

執行役員は以下のとおりであります。(取締役兼務者を除く)

職名	氏名
執行役員 品質管理本部長	及 川 博 之
執行役員 マーケティング本部長	河 野 好 彦
執行役員 ㈱甲府共和電業専務取締役	小 澤 正 夫
執行役員 営業本部副本部長(東日本営業部・営業スタッフ部門担当)兼販売支援部長	国 信 功
執行役員 エンジニアリング本部長	大 原 寿 昭
執行役員 経営管理本部副本部長兼情報システム部長	青 野 徹
執行役員 新市場開拓室長	前 田 芳 巳
執行役員 経営管理本部副本部長兼企画・経理部長	高 野 二三夫
執行役員 生産本部長兼生産管理部長	長谷川 栄 一

6 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1) 【コーポレート・ガバナンスの状況】

当社のコーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方は、「計測と制御を通じて“安全と安心”の提供で社会に貢献する“技術創造企業”」という企業理念の実現に向け、顧客、株主、取引先、従業員などすべてのステークホルダーの期待に沿う健全な経営を目指しております。

①企業統治の体制

イ 企業統治の体制の概要とその体制を採用する理由

当社ならびに当社の子会社(以下「当社グループ」といいます。)は、「計測と制御を通じて“安全と安心”の提供で社会に貢献する“技術創造企業”」を企業理念とし、顧客、株主、取引先、従業員などのすべてのステークホルダーとの良好な信頼関係を保ちながら、応力計測を通じて“安全と安心”を提供することで社会の発展に貢献できる企業を目指しております。

当社は監査等委員会設置会社を採用しており、取締役会の監督機能とコーポレート・ガバナンス体制の強化をはかるとともに、権限委譲による迅速な意思決定と業務執行により、経営の健全性と効率性を高めることを目的としております。

また、変化の激しい経営環境において迅速かつ適切な意思決定を行うべく執行役員制度を導入しております。

当社は取締役会が経営の意思決定機関として重要事項を決定し、その執行と業務管理は常務会および執行役員会が担っております。

経営に対する監査・監督機能といたしましては、社内出身者1名と社外取締役2名により構成される監査等委員会を設置し、監査等委員は取締役会ほか重要会議に出席して経営の透明性・適法性を高める役割を担うとともに、当社の各業務部門等の監査を通じて取締役および執行役員の業務執行状況のモニタリングにあっております。

社長直属の組織として内部監査室を設置し、年度監査計画に基づいた社内監査を行い、業務執行の適正化をはかっております。

なお、当社はコーポレート・ガバナンスについて、下記に掲げる条項の実現に努めることでその実効性を高めることが出来ると考えており、当社の事業内容・規模を考慮しつつ、常に最適な体制整備を実施いたします。

- i 株主権利の実質的な平等性の確保
- ii 株主以外のステークホルダーとの適切な協働
- iii 株主対話を踏まえた適切かつ有用な情報開示
- iv 取締役会等の然るべき責務の履行
- v 株主との建設的な対話

ロ 内部統制システム、リスク管理体制の整備状況および提出会社の子会社の業務の適正性を確保するための体制整備の状況

当社は取締役会において、内部統制システム構築の基本方針について以下のとおり決議しております。

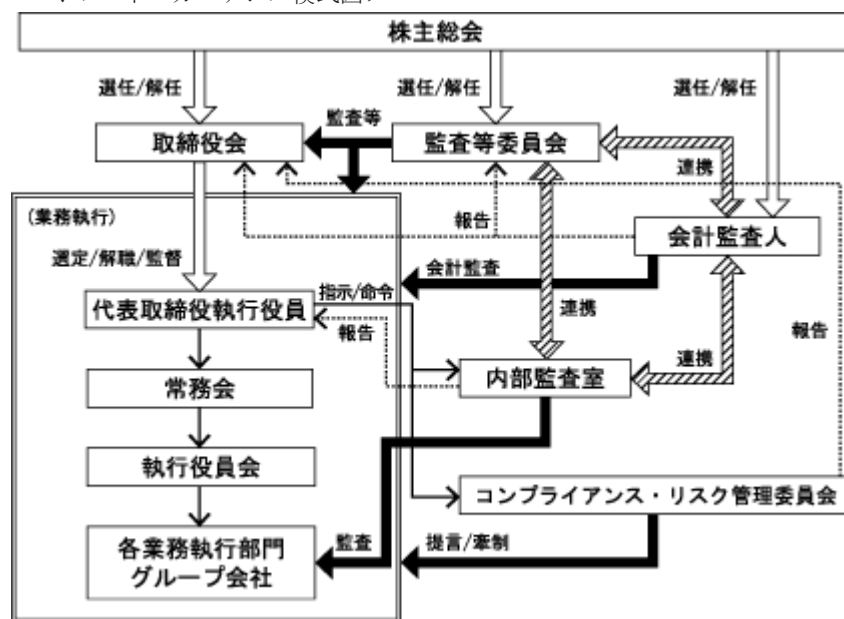
- i 当社グループの取締役、執行役員その他これらの者に相当する者(以下「取締役等」という)および使用人の職務の執行が法令および定款に適合することを確保するための体制
 - ・当社は、社是、信条、企業理念ならびに経営の基本方針を示す「当社の企業倫理と行動基準」を制定し、当社グループの取締役等および使用人に法令と社会倫理の遵守を企業活動の原点とすることを周知徹底する。
 - ・当社は、コンプライアンスを体系的に規定するコンプライアンス基本規定を取締役ににて定める。
 - ・代表取締役社長は、コンプライアンス・リスク管理全体の統括責任者を任命し、コンプライアンス体制の構築、維持・整備にあたる。
 - ・当社は、コンプライアンス全体を統括する組織としてコンプライアンス・リスク管理委員会を設置し、コンプライアンスに係わる実行計画を策定する。また、その下部組織に当社各部門の代表者および子会社の代表者で構成されるコンプライアンス担当者会議を設置し、実行計画に基づくコンプライアンス教育の実施、コンプライアンス違反の有無の確認、他社事例の研究等、問題点の把握と改善に取り組む。コンプライアンス統括部署は法務・コンプライアンス室とする。
 - ・統括責任者は、定期的に当社グループのコンプライアンス体制整備についてレビューし、その結果を常務会、

- 取締役会に報告する。
- ・当社グループは、取締役等および使用人が企業倫理・行動基準に違反する行為やその疑いのある行為を発見した場合に直接通報・相談することができるホットラインを設置する。会社は通報内容を秘守し、通報者に対し不利益な扱いは行わない。
- ii 取締役の職務執行に係わる情報の保存および管理に関する体制
- ・取締役は、職務の執行に係わる以下の重要な文書および重要な情報を、社内規定に基づき担当職務に従い適切に保存し管理する。
 - (a) 株主総会議事録と関連資料
 - (b) 取締役会議事録と関連資料
 - (c) 取締役が主催するその他の重要な会議の記録および関連資料
 - (d) 稟議書等、取締役を決定者とする法定書類および付属書類
 - (e) その他取締役の職務執行に関する重要な文書
 - ・取締役は、常時これらの文書等を閲覧できるものとする。
 - ・上記に定める文書の保管期限は、法令に別段の定めのない限り、社内規定の定めるところによる。
- iii 当社グループの損失の危険に関する規定その他の体制
- ・当社は、リスク管理を体系的に規定するリスク管理基本規定を取締役会にて定める。
 - ・代表取締役社長は、コンプライアンス・リスク管理全体の統括責任者を任命し、リスク管理体制の構築、維持・整備にあたる。
 - ・当社は、リスク管理全体を統括する組織としてコンプライアンス・リスク管理委員会を設置し、リスク管理に係わる実行計画を策定する。またその下部組織に当社各部門の代表者および子会社の代表者で構成されるリスク管理担当者会議を設置し、実行計画に基づき、リスクの洗い出し、リスクの評価、重点管理リスクの軽減等に取り組む。
 - ・統括責任者は、コンプライアンス・リスク管理委員会を定期的開催し、当社グループのリスク管理の体制整備についてレビューを行い、その結果を常務会、取締役会に報告する。
 - ・不測の事態が発生した場合は、経営危機管理規定に従い、代表取締役社長の指揮下に緊急対策本部を設置し、迅速・適切な対応を行い、損害の拡大を防止する体制を整える。
- iv 当社グループの取締役等の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制
- ・当社は、取締役会を原則毎月開催し、重要事項の決定ならびに取締役の業務執行状況の監督等を行う。
 - ・当社は、取締役会の機能を強化し経営効率を向上させるため、常務会および執行役員会を定期的開催し、業務執行に関する基本的事項および重要事項について報告するとともに機動的に意思決定を行う。
 - ・業務の運営については、将来の事業環境を踏まえ、当社で中期経営計画および年度事業計画を作成し、当社グループの目標を設定する。また、当社の子会社管理部門より各子会社へ当該計画を周知徹底し、各子会社は当該計画に基づいて事業計画等を作成する。
 - ・各部門担当取締役等は、方針管理規定に基づき事業年度の目標達成に向け具体的な実行計画を作成し、実行を推進する。
- v 当社および当社の子会社から成る企業集団における業務の適正を確保するための体制
- ・当社が定める「当社の企業倫理と行動基準」は、当社グループ共通の業務運営方針を定めたものであり、これを基本にして当社グループ各社が諸規定を定めるものとする。
 - ・当社は、子会社に役員を配置し、子会社が当社の経営方針に沿って適正に運営されていることを確認する体制をとる。
 - ・当社は、子会社の経営についてはその自主性を尊重する。一方、子会社は、当社に事業内容、財務内容を定期的に報告し、業務上重要事項が発生した場合は都度報告し、重要案件については事前協議を行うこととする。
- vi 監査等委員会の職務を補助すべき取締役および使用人に関する体制
- ・当社は、監査等委員会の職務を補助すべき取締役は置かない。
 - ・当社は、監査等委員会が職務を補助すべき使用人を置くことを求めた場合、監査等委員会と協議の上、必要な知見を持った使用人を置くこととする。
- vii 前項の使用人に対する取締役(監査等委員である取締役を除く)からの独立性に関する事項および当該使用人

に対する指示の実効性の確保に関する事項

- ・前項にいう監査等委員会の職務を補助するためにする事務について、監査等委員会は、指示により事務内容について使用人に守秘義務を課することができる。
 - ・監査等委員会が指定する補助すべき期間中は、任命された使用人への指揮権は監査等委員会に移譲されたものとし、取締役(監査等委員である取締役を除く)からの独立性を確保する。
 - ・監査等委員会が指定する補助すべき期間中における、任命された使用人の人事評価および異動は、監査等委員会の意見を尊重して決定する。
- viii 当社グループの取締役等および使用人が当社の監査等委員会に報告するための体制および監査等委員会への報告をした者が当該報告をしたことを理由として不利な取扱いを受けないことを確保するための体制
- ・当社グループの取締役等および使用人は、法令等の違反行為等、当社グループに重大な損害を及ぼすおそれのある事実を発見次第、速やかに当社各部門の代表者および子会社の代表者もしくはコンプライアンス統括責任者に報告するものとする。報告を受けた者は、報告の内、以下に定める事項について、監査等委員会に対して報告を行う。
 - (a) 会社の業績に大きな影響を与える事項
 - (b) 会社の信用を大きく低下させる事項
 - (c) 法令、定款、「当社の企業倫理と行動基準」への違反で重大な事項
 - (d) その他上記に準ずる事項
 - ・前項の報告をした者に対し、当該報告をしたことを理由とした不利益な処遇は、一切行わない。
- ix その他監査等委員会の監査が実効的に行われることを確保するための体制および監査等委員の職務の執行について生じる費用等の処理に係る方針
- ・監査等委員は、重要な意思決定のプロセスや業務の執行状況を把握するため、取締役会および常務会等の重要会議に出席する。
 - ・監査等委員会は、稟議書等業務執行に関する重要な文書を閲覧し、必要に応じて取締役等および使用人に説明を求めることとする。
 - ・監査等委員会は「監査等委員会規則」および「監査等委員会監査等基準」に基づく独立性と権限により、監査の実効性を確保するとともに、内部監査室および会計監査人と連携を保ちながら自らの監査結果の達成をはかる。
 - ・監査等委員の職務の執行について生じる費用については、所定の手続きに従って当社が支払うものとする。
- x 財務報告の信頼性を確保するための体制
- ・当社グループの財務報告の作成にあたっては、一般に公正妥当と認められる企業会計の基準および財務報告を規制する法令に準拠した経理規定を定める。
 - ・代表取締役社長は、財務報告の信頼性を確保するための内部統制システムの整備状況および運用状況について自ら評価し、内部統制報告書として結果報告を行うとともに、不備事項については適時に改善を実施する。
- xi 反社会的勢力排除に向けた体制
- ・当社は、コンプライアンスへの重要な取り組みとして、暴力団等の反社会的勢力との関係遮断には毅然とした態度で臨む。またその旨を「当社の企業倫理と行動基準」の中に定め、当社グループの取締役等および使用人への周知を徹底するとともに、顧客や取引先との契約に際しては、反社会的勢力排除に関する条項を取引基本契約書等の中に規定してその排除に努める。さらに当社は、警察等関連機関を通じて不当要求等への適切な対応方法や関連情報の収集を行い、事案の発生時には、同機関や顧問弁護士と緊密に連携して、速やかに対処できる体制を構築する。

<コーポレート・ガバナンス模式図>



②内部監査及び監査等委員会監査

内部監査部門として内部監査室(3名)が監査等委員会および会計監査人と連携し、各業務執行状況の適正性を監査し、報告・提言を行っております。

監査等委員会は3名(うち2名は社外取締役)で構成され、取締役会や常務会等の重要な会議に出席するほか、当社および当社子会社の監査を実施し、業務執行の適法性、妥当性に関するチェックを行うなど、監査の充実をはかっております。

監査等委員会と会計監査人は、年間監査計画に基づき、監査業務報告等の定期的な打合せを行い、相互に連携の強化をはかっております。

監査等委員会と内部監査室は、定期的に情報交換を行い、相互に連携し各業務執行状況の適正等を監査し、報告・提言を行っております。

③社外取締役

当社は、社外取締役を2名(いずれも監査等委員である取締役)選任しております。社外取締役と当社は特筆すべき利害関係はありません。

社外取締役は、独立した立場で様々な視点から適宜意見等の発言を行うことで、経営の透明性を高める役割を果たしております。

青柳裕史氏は、金融機関における取締役等を歴任する等豊富な実務経験があることから、金融面を始めとした幅広い知識と財務・会計に関する相当程度の知見を有しております。同氏は当社の取引先であるみずほ銀行(旧富士銀行)およびみずほ信託銀行の出身者ですが、同行を2009年に退職し相当の期間が経過しており、その後当社と直接関係のない企業に在籍しております。同行との取引依存度も低く、当社への影響は希薄であるため、一般株主との利益相反が生じる恐れがないと判断し、独立役員として指定しております。

和田敏氏は、金融機関における豊富な実務経験に加え、監査部長の経験もあることから、金融面を始めとした幅広い知識と財務・監査に関する相当程度の知見を有しております。同氏は当社の取引先である山形銀行の出身者ですが、同行を退職後当社と直接取引のない企業に在籍しております。同行との取引依存度も低く、当社への影響は希薄であるため、一般株主との利益相反が生じる恐れがないと判断し、独立役員として指定しております。

なお、当社と各社外取締役との間では、会社法第427条第1項の規定に基づき、同法第423条第1項の損害賠償責任を限定する契約を締結しております。当該契約に基づく損害賠償責任限度額は法令が定める額としております。

また、当社は、社外取締役を選任するための提出会社からの独立性に関する基準又は方針はないものの、選任にあたっては、東京証券取引所の独立役員の独立性に関する判断基準等を参考しております。

④ 役員の報酬等

イ 提出会社の役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (千円)	報酬等の種類別の総額(千円)					対象となる 役員の員数 (名)
		基本報酬	ストック オプション	賞与	退職慰労引当 金繰入額	退職慰労金	
取締役(監査等委員及 び社外取締役を除く)	142,377	90,714	—	30,000	21,663	—	6
監査等委員(社外取締 役を除く)	13,800	13,800	—	—	—	—	2
社外役員	10,800	10,800	—	—	—	—	2

(注)株主総会の決議による報酬限度額(基本報酬および賞与の総額であり、使用人分給与および役員退職慰労金を含んでおりません。)

取締役分(監査等委員を除く) 年額 200,000千円(2016年3月30日)

取締役分(監査等委員) 年額 45,000千円(2016年3月30日)

ロ 提出会社の役員ごとの連結報酬の総額等

連結報酬等の総額が1億円以上であるものが存在しないため、記載しておりません。

ハ 使用人兼務役員の使用人給与のうち、重要なもの

総額(千円)	対象となる役員の 員数(名)	内容
45,240	4	本部長としての職務に対する給与

ニ 役員の報酬等の額の決定に関する方針

役員の報酬の決定につきましては、2016年3月30日開催の第69期定時株主総会の決議により定められた報酬額(取締役(監査等委員である取締役を除く)は年額200,000千円以内、監査等委員である取締役は年額45,000千円以内)の範囲内において決定いたします。

取締役(監査等委員である取締役を除く)については業績を勘案しながら取締役会で定める一定の基準に従って決定し、監査等委員である取締役については監査等委員の協議により決定しております。

賞与の決定につきましては、当年度の予想税引前当期純利益に対する内規で定めた一定割合を支給限度額として、取締役(監査等委員である取締役を除く)について取締役会決議により決定しております。

⑤株式の保有状況

イ 保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

銘柄数 22銘柄

貸借対照表計上額の合計額 1,446,665千円

ロ 保有目的が純投資目的以外である投資株式の保有区分、銘柄、株式数、貸借対照表計上額及び保有目的
(前事業年度)

特定投資株式

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表計上額 (千円)	保有目的
西華産業(株)	186,400	566,656	取引関係の維持
(株)ニッカトー	400,000	426,400	取引関係の維持
(株)チノー	140,000	238,700	取引関係の維持
(株)大紀アルミニウム工業所	189,000	166,131	取引関係の維持
富士急行(株)	50,000	162,250	取引関係の維持
(株)みずほフィナンシャルグループ	727,400	148,826	取引関係の維持
(株)三菱UFJフィナンシャル・グループ	129,400	106,936	取引関係の維持
(株)明電舎	126,000	58,716	取引関係の維持
岩崎電気(株)	25,400	42,672	取引関係の維持
(株)山形銀行	10,600	26,076	取引関係の維持
中外炉工業(株)	9,200	22,770	取引関係の維持
(株)安藤・間	20,000	17,640	取引関係の維持
丸文(株)	15,000	17,370	取引関係の維持
澁澤倉庫(株)	7,000	14,168	取引関係の維持
(株)山梨中央銀行	28,000	13,776	取引関係の維持
東日本旅客鉄道(株)	1,000	10,995	取引関係の維持
西日本旅客鉄道(株)	1,000	8,227	取引関係の維持
(株)りそなホールディングス	9,300	6,259	取引関係の維持
第一生命ホールディングス(株)	600	1,394	取引関係の維持
(株)三井住友フィナンシャルグループ	200	973	取引関係の維持

(当事業年度)

特定投資株式

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表計上額 (千円)	保有目的
(株)ニッコー	400,000	350,800	取引関係の維持
西華産業(株)	186,400	283,141	取引関係の維持
(株)チノー	140,000	171,080	取引関係の維持
富士急行(株)	50,000	162,000	取引関係の維持
(株)みずほフィナンシャルグループ	727,400	123,876	取引関係の維持
(株)大紀アルミニウム工業所	189,000	107,163	取引関係の維持
(株)三菱UFJフィナンシャル・グループ	129,400	69,604	取引関係の維持
(株)明電舎	25,200	34,851	取引関係の維持
岩崎電気(株)	25,400	32,867	取引関係の維持
(株)山形銀行	10,600	22,143	取引関係の維持
中外炉工業(株)	9,200	18,952	取引関係の維持
(株)安藤・間	20,000	14,520	取引関係の維持
澁澤倉庫(株)	7,000	11,221	取引関係の維持
丸文(株)	15,000	10,200	取引関係の維持
東日本旅客鉄道(株)	1,000	9,711	取引関係の維持
(株)山梨中央銀行	5,600	7,896	取引関係の維持
西日本旅客鉄道(株)	1,000	7,761	取引関係の維持
(株)りそなホールディングス	9,300	4,916	取引関係の維持
第一生命ホールディングス(株)	600	1,030	取引関係の維持
(株)三井住友フィナンシャルグループ	200	729	取引関係の維持

ハ 保有目的が純投資目的である投資株式
該当事項はありません。

⑥会計監査の状況

当社は、会計監査人としてEY新日本有限責任監査法人を選任しておりますが、同監査法人及び同監査に従事する同監査法人の業務執行社員と当社の間には、特別の利害関係はありません。

当社の監査業務を執行した公認会計士の氏名等は次のとおりです。

指定有限責任社員 業務執行社員 野 本 博 之 EY新日本有限責任監査法人

指定有限責任社員 業務執行社員 飯 畑 史 朗 EY新日本有限責任監査法人

当社の会計監査業務に係る補助者の構成は次のとおりです。

公認会計士 7名

会計士試験合格者 3名

そ の 他 15名

⑦取締役会で決議できる株主総会決議事項

イ 自己の株式の取得

自己の株式の取得について、経済情勢の変化に対応して財務政策等の経営諸施策を機動的に遂行することを可能とするため、会社法第165条第2項に基づき、取締役会の決議によって市場取引等により自己の株式を取得することができる旨を定款により定めております。

ロ 取締役の責任免除

取締役の職務遂行について期待される役割を十分発揮できるようにするため、会社法第426条第1項の規定により、任務を怠ったことによる取締役(取締役であった者を含む。)の損害賠償責任を、法令の限度において、取締役の決議によって免除することができる旨を定款により定めております。

⑧取締役の定数

取締役の定員を15名以内とし、このうち監査等委員である取締役を3名以上とする旨を定款により定めております。

⑨取締役の選任の決議要件

取締役の選任の決議要件は、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨を定款に定めております。また取締役の選任決議は累積投票によらない旨を定款に定めております。

⑩株主総会の特別決議要件

会社法第309条第2項に定める決議について、株主総会において議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上の多数をもって行う旨を定款に定めております。これは、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものであります。

(2) 【監査報酬の内容等】

① 【監査公認会計士等に対する報酬の内容】

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬(千円)	非監査業務に基づく報酬(千円)	監査証明業務に基づく報酬(千円)	非監査業務に基づく報酬(千円)
提出会社	37,000	—	37,000	—
連結子会社	—	—	—	—
計	37,000	—	37,000	—

② 【その他重要な報酬の内容】

該当事項はありません。

③ 【監査公認会計士等の提出会社に対する非監査業務の内容】

前連結会計年度

該当事項はありません。

当連結会計年度

該当事項はありません。

④ 【監査報酬の決定方針】

該当事項はありませんが、監査日数等を勘案して決定しております。

第5 【経理の状況】

1 連結財務諸表および財務諸表の作成方法について

(1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和51年大蔵省令第28号。以下、「連結財務諸表規則」という。)に基づいて作成しております。

(2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和38年大蔵省令第59号。以下「財務諸表等規則」という。)に基づいて作成しております。

なお、当社は、特例財務諸表提出会社に該当し、財務諸表等規則第127条の規定により財務諸表を作成していません。

2 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度(2018年1月1日から2018年12月31日まで)および事業年度(2018年1月1日から2018年12月31日まで)の連結財務諸表および財務諸表について、EY新日本有限責任監査法人により監査を受けております。

なお、EY新日本有限責任監査法人は、2018年7月1日をもって新日本有限責任監査法人より名称変更していません。

3 連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、以下のとおり連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。

会計基準等の内容を適切に把握できる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入し新会計基準等の情報を入手するとともに、会計基準設定主体等の行う研修へ参加しております。

1 【連結財務諸表等】

(1) 【連結財務諸表】

① 【連結貸借対照表】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (2017年12月31日)	当連結会計年度 (2018年12月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	5,612,067	5,923,915
受取手形及び売掛金	※3 5,822,383	※3 5,813,744
有価証券	—	500,000
商品及び製品	1,254,815	1,058,631
仕掛品	1,313,456	1,275,560
未成工事支出金	32,794	47,988
原材料及び貯蔵品	1,555,760	1,338,587
繰延税金資産	281,249	278,825
その他	93,920	136,926
貸倒引当金	△3,885	△571
流動資産合計	15,962,561	16,373,608
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物（純額）	2,747,262	2,557,794
機械装置及び運搬具（純額）	728,335	665,483
工具、器具及び備品（純額）	246,155	260,801
土地	1,068,050	1,068,050
建設仮勘定	119,889	145,917
その他	46,078	66,983
有形固定資産合計	※1 4,955,771	※1 4,765,031
無形固定資産		
その他	134,787	129,812
無形固定資産合計	134,787	129,812
投資その他の資産		
投資有価証券	※2 2,075,493	1,446,665
従業員に対する長期貸付金	12,025	5,771
退職給付に係る資産	—	279,695
繰延税金資産	—	183,894
その他	143,933	138,217
貸倒引当金	△5,744	△0
投資その他の資産合計	2,225,706	2,054,244
固定資産合計	7,316,266	6,949,088
資産合計	23,278,827	23,322,696

(単位：千円)

	前連結会計年度 (2017年12月31日)	当連結会計年度 (2018年12月31日)
負債の部		
流動負債		
支払手形及び買掛金	1,588,462	1,477,786
短期借入金	1,450,000	1,350,000
1年内返済予定の長期借入金	303,717	490,200
未払法人税等	228,437	238,053
賞与引当金	189,031	188,717
役員賞与引当金	19,400	35,950
設備関係支払手形	90,334	35,437
その他	1,452,250	1,592,451
流動負債合計	5,321,633	5,408,596
固定負債		
長期借入金	942,800	452,600
繰延税金負債	37,265	—
役員退職慰労引当金	78,441	103,109
執行役員退職慰労引当金	10,740	18,066
退職給付に係る負債	1,245,877	1,671,339
資産除去債務	12,896	13,153
その他	54,426	64,911
固定負債合計	2,382,447	2,323,180
負債合計	7,704,080	7,731,776
純資産の部		
株主資本		
資本金	1,723,992	1,723,992
資本剰余金	1,854,080	1,854,080
利益剰余金	10,693,296	11,514,252
自己株式	△14,209	△158,559
株主資本合計	14,257,159	14,933,765
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	884,515	459,582
為替換算調整勘定	60,534	54,213
退職給付に係る調整累計額	296,138	63,449
その他の包括利益累計額合計	1,241,188	577,246
非支配株主持分	76,398	79,907
純資産合計	15,574,746	15,590,920
負債純資産合計	23,278,827	23,322,696

②【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当連結会計年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
売上高	15,350,765	15,990,979
売上原価	※2,3 9,725,810	※2,3 10,017,833
売上総利益	5,624,955	5,973,146
販売費及び一般管理費	※1 4,296,113	※1 4,447,270
営業利益	1,328,842	1,525,876
営業外収益		
受取利息	10,326	9,406
受取配当金	42,727	43,463
補助金収入	16,337	25,706
その他	43,493	28,997
営業外収益合計	112,885	107,573
営業外費用		
支払利息	19,980	17,695
為替差損	—	20,239
コミットメントフィー	7,955	14,585
その他	8,607	14,137
営業外費用合計	36,542	66,658
経常利益	1,405,184	1,566,791
特別利益		
負ののれん発生益	30,925	—
特別利益合計	30,925	—
特別損失		
関係会社株式評価損	18,697	—
その他	4	—
特別損失合計	18,701	—
税金等調整前当期純利益	1,417,409	1,566,791
法人税、住民税及び事業税	412,330	405,468
法人税等調整額	46,669	71,270
法人税等合計	458,999	476,739
当期純利益	958,410	1,090,052
非支配株主に帰属する当期純利益又は非支配株主に 帰属する当期純損失(△)	5,614	△11,014
親会社株主に帰属する当期純利益	952,795	1,101,067

【連結包括利益計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当連結会計年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
当期純利益	958,410	1,090,052
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	520,552	△424,932
為替換算調整勘定	△9,768	8,203
退職給付に係る調整額	128,228	△232,688
その他の包括利益合計	※1 639,012	※1 △649,417
包括利益	1,597,423	440,635
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	1,596,781	437,126
非支配株主に係る包括利益	642	3,509

③【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度(自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)

(単位：千円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	1,723,992	1,854,080	10,020,612	△105,328	13,493,356
当期変動額					
剰余金の配当			△280,111		△280,111
親会社株主に帰属する当期純利益			952,795		952,795
自己株式の取得				△25	△25
自己株式の処分				91,144	91,144
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)					
当期変動額合計	—	—	672,683	91,119	763,803
当期末残高	1,723,992	1,854,080	10,693,296	△14,209	14,257,159

	その他の包括利益累計額				非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	為替換算調整勘 定	退職給付に係る 調整累計額	その他の包括利 益累計額合計		
当期首残高	363,963	65,329	167,909	597,202	75,756	14,166,315
当期変動額						
剰余金の配当						△280,111
親会社株主に帰属する当期純利益						952,795
自己株式の取得						△25
自己株式の処分						91,144
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)	520,552	△4,795	128,228	643,985	642	644,627
当期変動額合計	520,552	△4,795	128,228	643,985	642	1,408,430
当期末残高	884,515	60,534	296,138	1,241,188	76,398	15,574,746

当連結会計年度(自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)

(単位：千円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	1,723,992	1,854,080	10,693,296	△14,209	14,257,159
当期変動額					
剰余金の配当			△280,111		△280,111
親会社株主に帰属する当期純利益			1,101,067		1,101,067
自己株式の取得				△144,350	△144,350
自己株式の処分					
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)					
当期変動額合計	—	—	820,956	△144,350	676,605
当期末残高	1,723,992	1,854,080	11,514,252	△158,559	14,933,765

	その他の包括利益累計額				非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	為替換算調整勘 定	退職給付に係る 調整累計額	その他の包括利 益累計額合計		
当期首残高	884,515	60,534	296,138	1,241,188	76,398	15,574,746
当期変動額						
剰余金の配当						△280,111
親会社株主に帰属する当期純利益						1,101,067
自己株式の取得						△144,350
自己株式の処分						
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)	△424,932	△6,320	△232,688	△663,941	3,509	△660,432
当期変動額合計	△424,932	△6,320	△232,688	△663,941	3,509	16,173
当期末残高	459,582	54,213	63,449	577,246	79,907	15,590,920

④【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当連結会計年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	1,417,409	1,566,791
減価償却費	706,172	644,056
負ののれん発生益	△30,925	—
貸倒引当金の増減額 (△は減少)	255	△9,058
退職給付に係る負債の増減額 (△は減少)	△126,456	90,306
退職給付に係る資産の増減額 (△は増加)	—	△279,695
賞与引当金の増減額 (△は減少)	△15,642	△313
役員賞与引当金の増減額 (△は減少)	△9,650	16,550
執行役員退職慰労引当金の増減額 (△は減少)	6,690	7,326
役員退職慰労引当金の増減額 (△は減少)	△28,124	24,667
受取利息及び受取配当金	△53,054	△52,869
支払利息	19,980	17,695
売上債権の増減額 (△は増加)	△397,363	2,712
たな卸資産の増減額 (△は増加)	△230,807	435,200
仕入債務の増減額 (△は減少)	△109,845	△105,905
その他	224,769	38,774
小計	1,373,407	2,396,240
利息及び配当金の受取額	52,941	53,309
利息の支払額	△20,071	△17,765
法人税等の支払額	△460,277	△414,361
営業活動によるキャッシュ・フロー	945,999	2,017,422
投資活動によるキャッシュ・フロー		
定期預金の増減額 (△は増加)	1,676	6,155
有形固定資産の取得による支出	△430,461	△319,964
無形固定資産の取得による支出	△13,447	△57,083
連結の範囲の変更を伴う子会社株式の取得による収入	51,860	—
その他	5,016	20,975
投資活動によるキャッシュ・フロー	△385,355	△349,916
財務活動によるキャッシュ・フロー		
短期借入金の純増減額 (△は減少)	—	△100,000
長期借入金の返済による支出	△424,673	△303,717
自己株式の取得による支出	△25	△144,350
自己株式の処分による収入	77,657	—
配当金の支払額	△279,187	△279,509
その他	△26,833	△23,528
財務活動によるキャッシュ・フロー	△653,062	△851,104
現金及び現金同等物に係る換算差額	△11,681	1,602
現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)	△104,099	818,003
現金及び現金同等物の期首残高	5,331,167	5,227,067
現金及び現金同等物の期末残高	※1 5,227,067	※1 6,045,070

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1 連結の範囲に関する事項

連結子会社の数

10社

連結子会社名

株式会社山形共和電業、株式会社共和計測、株式会社ニューテック、株式会社甲府共和電業、株式会社共和サービスセンター、株式会社共和ハイテック、タマヤ計測システム株式会社、共和電業(上海)貿易有限公司、KYOWA AMERICAS INC.、KYOWA DENGYO (THAILAND) CO., LTD.

非連結子会社名

KYOWA DENGYO MALAYSIA SDN. BHD.

連結の範囲から除いた理由

非連結子会社は小規模会社であり、総資産、売上高、当期純損益(持分に見合う額)および利益剰余金(持分に見合う額)等はいずれも連結財務諸表に重要な影響を及ぼしていないため、連結の範囲から除いております。なお、KYOWA DENGYO MALAYSIA SDN. BHD. は当連結会計年度に清算終了しております。

2 持分法の適用に関する事項

持分法適用の非連結子会社および関連会社はありません。なお、非連結子会社であるKYOWA DENGYO MALAYSIA SDN. BHD. は小規模会社であり、連結財務諸表に重要な影響を及ぼしていないため、持分法を適用しておりません。

3 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社10社の決算日は、連結決算日と一致しております。

4 会計方針に関する事項

I 重要な資産の評価基準及び評価方法

① 有価証券

その他有価証券

時価のあるもの

決算日の市場価格等に基づく時価法(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)

時価のないもの

移動平均法による原価法

② たな卸資産

主として移動平均法による原価法(収益性の低下による簿価切下げの方法)

II 重要な減価償却資産の減価償却の方法

① 有形固定資産(リース資産を除く)

定率法

ただし、1998年4月1日以降に取得した建物(建物附属設備を除く)並びに2016年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物については、定額法を採用しております。

なお、耐用年数および残存価額については、法人税法に規定する方法と同一の基準によっております。

② 無形固定資産(リース資産を除く)

定額法

ただし、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間(5年)に基づく定額法によっております。

③ リース資産

所有権移転外ファイナンス・リースに係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。

III 重要な引当金の計上基準

① 貸倒引当金

債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

② 賞与引当金

従業員に対して支給する賞与に充てるため、支給見込額に基づき計上しております。

③ 役員賞与引当金

役員に対して支給する賞与に充てるため、支給見込額に基づき計上しております。

④ 役員退職慰労引当金

役員に対する退職慰労金の支出に備えるため、内規に基づく連結会計年度末要支給額を計上しております。

⑤ 執行役員退職慰労引当金

執行役員に対する退職慰労金の支出に備えるため、内規に基づく連結会計年度末要支給額を計上しております。

IV 退職給付に係る会計処理の方法

① 退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。

② 数理計算上の差異及び過去勤務費用の費用処理方法

数理計算上の差異は、主として各連結会計年度の発生における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(10年)による定額法により按分した額を、それぞれ発生の翌連結会計年度から費用処理しております。

過去勤務費用は、主としてその発生時の従業員の平均残存期間以内の一定の年数(10年)による定額法により費用処理しております。

V 重要な収益及び費用の計上基準

(完成工事高及び完成工事原価の計上基準)

当連結会計年度末までの進捗部分について成果の確実性が認められる工事については工事進行基準(工事の進捗率の見積りは原価比例法)を、その他の工事については工事完成基準を適用しております。

VI 重要なヘッジ会計の方法

① ヘッジ会計の方法

金利スワップについては、特例処理の要件を満たしているため、特例処理を採用しております。

② ヘッジ手段とヘッジ対象

ヘッジ手段…金利スワップ

ヘッジ対象…借入金の利息

③ ヘッジ方針

金利変動による借入債務の金利負担増大の可能性を減殺するために行っております。

④ ヘッジ有効性評価の方法

ヘッジ有効性評価については、明らかに高い有効性が認められるため評価を省略しております。

VII 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

手許現金、随時引出し可能な預金および容易に換金可能であり、かつ、価値変動について僅少なりリスクしか負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。

VIII 消費税及び地方消費税の会計処理

消費税等の会計処理は、税抜方式によっております。

(未適用の会計基準等)

「税効果会計に係る会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第28号 2018年2月16日)

「繰延税金資産の回収可能性に関する適用指針」(企業会計基準適用指針第26号 2018年2月16日)

(1)概要

「税効果会計に係る会計基準の適用指針」等は、日本公認会計士協会における税効果会計に関する実務指針を企業会計基準委員会に移管するに際して、基本的にその内容を踏襲した上で、必要と考えられる以下の見直しが行われたものであります。

(会計処理の見直しを行った主な取扱い)

- ・個別財務諸表における子会社株式等に係る将来加算一時差異の取扱い
- ・(分類1)に該当する企業における繰延税金資産の回収可能性に関する取扱い

(2)適用予定日

2019年12月期の期首から適用予定であります。

(3)当該会計基準等の適用による影響

「税効果会計に係る会計基準の適用指針」等の適用による連結財務諸表に与える影響額については、現時点で評価中であります。

「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2018年3月30日)

「収益認識に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第30号 2018年3月30日)

(1)概要

収益認識に関する包括的な会計基準であります。収益は、次の5つのステップを適用し認識されます。

ステップ1：顧客との契約を識別する。

ステップ2：契約における履行義務を識別する。

ステップ3：取引価格を算定する。

ステップ4：契約における履行義務に取引価格を配分する。

ステップ5：履行義務を充足した時に又は充足するにつれて収益を認識する。

(2)適用予定日

2022年12月期の期首から適用予定であります。

(3)当該会計基準等の適用による影響

「収益認識に関する会計基準」等の適用による連結財務諸表に与える影響額については、現時点で評価中であります。

(表示方法の変更)

(連結損益計算書関係)

前連結会計年度において、独立掲記しておりました「営業外収益」の「為替差益」及び「保険配当金」は、金額的重要性が乏しくなったため、当連結会計年度より「その他」に含めて表示しております。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の連結損益計算書において、「営業外収益」に表示していた「為替差益」12,280千円、「保険配当金」11,103千円、「その他」20,110千円は、「その他」43,493千円として組み替えております。

(連結貸借対照表関係)

※1 有形固定資産の減価償却累計額は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2017年12月31日)	当連結会計年度 (2018年12月31日)
減価償却累計額	7,347,159千円	7,809,983千円

※2 非連結子会社に対するものは、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2017年12月31日)	当連結会計年度 (2018年12月31日)
投資有価証券	16,356千円	一千円

※3 期末日満期手形等の会計処理は、手形交換日をもって決済処理しております。

なお、決算期末日は、金融機関の休業日のため期末日満期手形等の金額が下記のとおり含まれております。

	前連結会計年度 (2017年12月31日)	当連結会計年度 (2018年12月31日)
受取手形	163,687千円	101,351千円
電子記録債権	4,598	23,427

4 提出会社は、資金調達の効率化および安定化をはかるため取引銀行5行と特定融資枠(コミットメントライン)契約を締結しております。

連結会計年度における特定融資枠契約に係る借入金未実行残高等は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2017年12月31日)	当連結会計年度 (2018年12月31日)
特定融資枠契約の総額	1,750,000千円	1,750,000千円
当連結会計年度末借入残高	—	—
当連結会計年度末未使用残高	1,750,000	1,750,000

(連結損益計算書関係)

※1 販売費及び一般管理費の主なものは、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当連結会計年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
給与手当	1,377,790千円	1,410,673千円
賞与引当金繰入額	65,061	65,127
役員賞与引当金繰入額	19,400	35,950
退職給付費用	81,944	75,580
役員退職慰労引当金繰入額	31,358	25,387
執行役員退職慰労引当金繰入額	6,690	7,326
貸倒引当金繰入額	6,249	357

※2 当期製造費用に含まれる研究開発費は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当連結会計年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
当期製造費用	1,099,066千円	985,344千円

※3 通常の販売目的で保有するたな卸資産の収益性の低下による簿価切下額は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当連結会計年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
売上原価	286,365千円	175,866千円

(連結包括利益計算書関係)

※1 その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	前連結会計年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当連結会計年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
その他有価証券評価差額金		
当期発生額	750,291千円	△612,471千円
組替調整額	—	—
税効果調整前	750,291	△612,471
税効果額	△229,739	187,538
その他有価証券評価差額金	520,552	△424,932
為替換算調整勘定		
当期発生額	△9,768	8,203
退職給付に係る調整額		
当期発生額	212,253	△282,237
組替調整額	△22,943	△52,917
税効果調整前	189,310	△335,155
税効果額	△61,082	102,467
退職給付に係る調整額	128,228	△232,688
その他の包括利益合計	639,012	△649,417

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)

1 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度期首 株式数(株)	当連結会計年度増加 株式数(株)	当連結会計年度減少 株式数(株)	当連結会計年度末 株式数(株)
発行済株式				
普通株式	28,058,800	—	—	28,058,800
自己株式				
普通株式(注)	222,219	68	174,600	47,687

(注) 1. 普通株式の自己株式の増加68株は、単元未満株式の買取りによる増加であります。

2. 普通株式の自己株式の減少174,600株は、従業員持株会信託口から従業員持株会への売却によるものであります。

2 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (千円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2017年3月30日 定時株主総会	普通株式	280,111	利益剰余金	10	2016年12月31日	2017年3月31日

(注) 配当金の総額には、従業員持株会信託口に対する配当金1,746千円を含めております。

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌期となるもの

決議	株式の種類	配当金の総額 (千円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2018年3月29日 定時株主総会	普通株式	280,111	利益剰余金	10	2017年12月31日	2018年3月30日

当連結会計年度(自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)

1 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度期首 株式数(株)	当連結会計年度増加 株式数(株)	当連結会計年度減少 株式数(株)	当連結会計年度末 株式数(株)
発行済株式				
普通株式	28,058,800	—	—	28,058,800
自己株式				
普通株式(注)	47,687	359,082	—	406,769

(注) 1. 普通株式の自己株式の増加359,082株は、2018年12月17日開催の取締役会決議に基づく自己株式の取得による増加359,000株及び単元未満株式の買取りによる増加82株であります。

2 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (千円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2018年3月29日 定時株主総会	普通株式	280,111	利益剰余金	10	2017年12月31日	2018年3月30日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌期となるもの

決議	株式の種類	配当金の総額 (千円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2019年3月28日 定時株主総会	普通株式	331,824	利益剰余金	12	2018年12月31日	2019年3月29日

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

※1 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当連結会計年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
現金及び預金	5,612,067千円	5,923,915千円
有価証券勘定に含まれる譲渡性預金	—	500,000
預入期間が3か月を超える定期預金	△385,000	△378,844
現金及び現金同等物	5,227,067	6,045,070

(リース取引関係)

所有権移転外ファイナンス・リース取引

①リース資産の内容

固定資産

主に事務機器であります。

②リース資産の減価償却の内容

連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項「4 会計方針に関する事項 II 重要な減価償却資産の減価償却の方法」に記載のとおりであります。

(金融商品関係)

1 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社グループは、資金運用については安全性の高い金融商品に限定しております。また、デリバティブは、後述するリスクを回避するために使用しており、投機的な取引は行わない方針であります。

(2) 金融商品の内容およびそのリスク

営業債権である受取手形及び売掛金は、顧客の信用リスクにさらされております。

有価証券は、短期運用目的の譲渡性預金であり、安全かつ流動性の高いものであります。

投資有価証券は、業務上の関係を有する企業の株式であり、市場価格の変動リスクにさらされております。

営業債務である支払手形及び買掛金は、そのほとんどが4ヶ月以内の支払期日であります。

借入金の用途は運転資金および設備等投資資金であり、返済期日は最長で約3年であります。借入金の一部は、金利の変動リスクにさらされております。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

①信用リスク(取引先の契約不履行等に係るリスク)の管理

営業債権の信用リスクに対して、社内規定に基づき、外部信用調査機関の信用情報等を基に与信枠を設定し与信管理を行っております。

②市場リスク(市場価格や金利等の変動リスク)の管理

有価証券につきましては、取組方針に基づき安全性・流動性の高い金融商品に限定しております。

投資有価証券につきましては、定期的に時価や取引先企業の財務状況等を把握しております。

一部の長期借入金の金利変動リスクに対して金利スワップ取引を実施して支払利息の固定化を図るために、個別契約ごとにデリバティブ取引(金利スワップ取引)をヘッジ手段として利用しております。ヘッジの有効性の評価方法については、金利スワップの特例処理の要件を満たしているため、その判定をもって有効性の評価を省略しております。

③資金調達に係る流動性リスク(支払期日に支払いを実行できなくなるリスク)の管理

営業債務や借入金の流動性リスクに対して、月次で資金繰計画を作成するなどの方法により管理しております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合は合理的に算定された価額が含ま

まれております。当該価額の算定においては変動要因を織り込んでいるため、異なる前提条件を採用することにより当該価額が変動することもあります。

2 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価およびこれらの差額については、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは、次表には含めておりません(注)2を参照ください。)

前連結会計年度(2017年12月31日)

	連結貸借対照表計上額 (千円)	時価 (千円)	差額 (千円)
(1)現金及び預金	5,612,067	5,612,067	—
(2)受取手形及び売掛金	5,822,383	5,822,383	—
(3)投資有価証券	2,056,937	2,056,937	—
資産計	13,491,387	13,491,387	—
(1)支払手形及び買掛金	1,588,462	1,588,462	—
(2)短期借入金	1,450,000	1,450,000	—
(3)長期借入金(※)	1,246,517	1,254,310	△7,793
負債計	4,284,979	4,292,773	△7,793
デリバティブ取引	—	—	—

(※) 1年内返済予定の長期借入金およびデリバティブ取引を含めております。

当連結会計年度(2018年12月31日)

	連結貸借対照表計上額 (千円)	時価 (千円)	差額 (千円)
(1)現金及び預金	5,923,915	5,923,915	—
(2)受取手形及び売掛金	5,813,744	5,813,744	—
(3)有価証券	500,000	500,000	—
(4)投資有価証券	1,444,465	1,444,465	—
資産計	13,682,124	13,682,124	—
(1)支払手形及び買掛金	1,477,786	1,477,786	—
(2)短期借入金	1,350,000	1,350,000	—
(3)長期借入金(※)	942,800	946,514	△3,714
負債計	3,770,586	3,774,300	△3,714
デリバティブ取引	—	—	—

(※) 1年内返済予定の長期借入金およびデリバティブ取引を含めております。

(注) 1. 金融商品の時価の算定方法並びに有価証券およびデリバティブ取引に関する事項

資 産

(1)現金及び預金、(2)受取手形及び売掛金

これらは短期間で決済されるものであるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

(3)有価証券

短期運用目的の譲渡性預金であり短期間で決済されるものであるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

(4)投資有価証券

これらの時価について、株式等は取引所の価格によっております。また、保有目的ごとの有価証券に関する事項については、注記事項「有価証券関係」をご覧ください。

負 債

(1)支払手形及び買掛金、(2)短期借入金

これらは短期間で決済されるものであるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

(3)長期借入金

時価は、元利金の合計額を、同様の新規借入を行った場合に想定される利率で割り引いた現在価値により算定しております。

デリバティブ取引

金利スワップの特例処理によるものは、ヘッジ対象とされている長期借入金と一体として処理されているため、その時価は当該長期借入金の時価に含めて記載しております。

2. 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品の連結貸借対照表計上額

(単位：千円)

区分	2017年12月31日	2018年12月31日
非上場株式	2,200	2,200
非連結子会社株式	16,356	—

これらについては、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、「投資有価証券」には含めておりません。

3. 金融債権の連結決算日後の償還予定額

前連結会計年度(2017年12月31日)

	1年以内 (千円)	1年超5年以内 (千円)	5年超10年以内 (千円)	10年超 (千円)
(1)現金及び預金	5,612,067	—	—	—
(2)受取手形及び売掛金	5,822,383	—	—	—
合計	11,434,450	—	—	—

当連結会計年度(2018年12月31日)

	1年以内 (千円)	1年超5年以内 (千円)	5年超10年以内 (千円)	10年超 (千円)
(1)現金及び預金	5,912,476	—	—	—
(2)受取手形及び売掛金	5,813,744	—	—	—
(3)有価証券 その他有価証券のうち 満期があるもの 譲渡性預金	500,000	—	—	—
合計	12,226,220	—	—	—

4. 短期借入金及び長期借入金の連結決算日後の返済予定額

前連結会計年度(2017年12月31日)

	1年以内 (千円)	1年超5年以内 (千円)	5年超10年以内 (千円)	10年超 (千円)
短期借入金	1,450,000	—	—	—
長期借入金	303,717	942,800	—	—

当連結会計年度(2018年12月31日)

	1年以内 (千円)	1年超5年以内 (千円)	5年超10年以内 (千円)	10年超 (千円)
短期借入金	1,350,000	—	—	—
長期借入金	490,200	452,600	—	—

(有価証券関係)

1 その他有価証券で時価のあるもの

	種類	前連結会計年度(2017年12月31日)			当連結会計年度(2018年12月31日)		
		連結貸借対照表計上額(千円)	取得原価(千円)	差額(千円)	連結貸借対照表計上額(千円)	取得原価(千円)	差額(千円)
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	株式	2,056,937	782,051	1,274,885	1,403,701	731,728	671,973
	小計	2,056,937	782,051	1,274,885	1,403,701	731,728	671,973
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの	(1) 株式	—	—	—	40,763	50,322	△9,558
	(2) 譲渡性預金	—	—	—	500,000	500,000	—
	小計	—	—	—	540,763	550,322	△9,558
合計		2,056,937	782,051	1,274,885	1,944,465	1,282,051	662,414

2 連結会計年度中に売却したその他有価証券

前連結会計年度(自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)

該当事項はありません。

当連結会計年度(自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)

該当事項はありません。

3 減損処理を行った有価証券

前連結会計年度(自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)

有価証券について18,697千円(その他有価証券の株式18,697千円)減損処理を行っております。

当連結会計年度(自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)

該当事項はありません。

なお、減損処理にあたっては、期末における時価が取得原価の50%以上下落した場合には全て減損処理を行い、30%以上50%未満下落した場合には、回復可能性を総合的に判断して必要と認められた額について減損処理を行っております。

(デリバティブ取引関係)

前連結会計年度(2017年12月31日)

1 ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

(1) 金利関連

利用しているデリバティブ取引は、金利スワップ取引であります。

ヘッジ会計の方法	デリバティブ取引の種類等	主なヘッジ対象	契約額等(千円)	契約額のうち1年超(千円)	時価(千円)
金利スワップの特例処理	金利スワップ取引 支払固定・受取変動	長期借入金	890,000	730,000	(注)

(注)金利スワップの特例処理によるものは、ヘッジ対象とされている長期借入金と一体として処理されているため、その時価は、当該長期借入金の時価に含めて記載しております。

当連結会計年度(2018年12月31日)

1 ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

(1) 金利関連

利用しているデリバティブ取引は、金利スワップ取引であります。

ヘッジ会計の方法	デリバティブ取引の種類等	主なヘッジ対象	契約額等(千円)	契約額のうち1年超(千円)	時価(千円)
金利スワップの特例処理	金利スワップ取引 支払固定・受取変動	長期借入金	730,000	320,000	(注)

(注)金利スワップの特例処理によるものは、ヘッジ対象とされている長期借入金と一体として処理されているため、その時価は、当該長期借入金の時価に含めて記載しております。

(退職給付関係)

1 採用している退職給付制度の概要

当社及び一部の国内の連結子会社は確定給付型企业年金制度及び退職一時金制度を設けております。また、当社については確定拠出型退職給付制度を合わせて採用しております。

さらに、一部の連結子会社は中小企業退職共済制度を採用しております。

なお、一部の連結子会社が有する退職一時金制度は、簡便法により退職給付に係る負債及び退職給付費用を計算しております。

2 確定給付制度

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表(簡便法を適用した制度を除く。)

	(単位:千円)	
	前連結会計年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当連結会計年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
退職給付債務の期首残高	4,126,924	4,128,818
勤務費用	247,619	247,881
利息費用	24,761	24,772
数理計算上の差異の発生額	△18,483	△24,404
退職給付の支払額	△252,003	△318,773
退職給付債務の期末残高	4,128,818	4,058,294

(2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表（簡便法を適用した制度を除く。）

	(単位：千円)	
	前連結会計年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当連結会計年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
年金資産の期首残高	2,599,167	2,917,951
期待運用収益	77,975	87,538
数理計算上の差異の発生額	193,770	△306,642
事業主からの拠出額	185,486	183,830
退職給付の支払額	△138,448	△177,021
年金資産の期末残高	2,917,951	2,705,656

(3) 簡便法を適用した制度の、退職給付に係る負債の期首残高と期末残高の調整表

	(単位：千円)	
	前連結会計年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当連結会計年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
退職給付に係る負債の期首残高	—	35,010
新規連結による増加額	33,887	—
退職給付費用	1,122	4,126
退職給付の支払額	—	△130
退職給付に係る負債の期末残高	35,010	39,006

(4) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

	(単位：千円)	
	前連結会計年度 (2017年12月31日)	当連結会計年度 (2018年12月31日)
積立型制度の退職給付債務	2,453,967	2,425,961
年金資産	△2,917,951	△2,705,656
	△463,984	△279,695
非積立型制度の退職給付債務	1,709,861	1,671,339
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	1,245,877	1,391,644
退職給付に係る負債	1,245,877	1,671,339
退職給付に係る資産	—	△279,695
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	1,245,877	1,391,644

(5) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

	(単位：千円)	
	前連結会計年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当連結会計年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
勤務費用	247,619	247,881
利息費用	24,761	24,772
期待運用収益	△77,975	△87,538
数理計算上の差異の費用処理額	3,039	△26,934
過去勤務費用の費用処理額	△25,982	△25,982
簡便法で計算した退職給付費用	1,122	4,126
確定給付制度に係る退職給付費用	172,585	136,324

(6) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

	(単位：千円)	
	前連結会計年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当連結会計年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
過去勤務費用	△25,982	△25,982
数理計算上の差異	215,293	△309,172
合計	189,310	△335,155

(7) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

	(単位：千円)	
	前連結会計年度 (2017年12月31日)	当連結会計年度 (2018年12月31日)
未認識過去勤務費用	28,147	2,165
未認識数理計算上の差異	403,829	94,656
合計	431,977	96,822

(8) 年金資産に関する事項

① 年金資産の主な内訳

年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2017年12月31日)	当連結会計年度 (2018年12月31日)
債券	45.8%	46.7%
株式	48.4	45.4
その他	5.8	7.9
合計	100.0	100.0

② 長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在および予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在および将来期待される長期の収益率を考慮しております。

(9) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎

	前連結会計年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当連結会計年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
割引率	0.6%	0.6%
長期期待運用収益率	3.0	3.0
予想昇給率	5.3	5.3

3 確定拠出制度

当社および連結子会社の確定拠出制度への要拠出額（中小企業退職金共済制度への要拠出額を含む）は、前連結会計年度21,236千円、当連結会計年度21,686千円でありました。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

(繰延税金資産)

	前連結会計年度 (2017年12月31日)	当連結会計年度 (2018年12月31日)
退職給付に係る負債	390,466千円	520,961千円
未払事業税等	19,186	22,283
役員退職慰労引当金	27,604	37,499
賞与引当金	60,388	59,850
たな卸資産評価減	162,771	151,588
投資有価証券評価損	85,343	79,618
その他	77,461	70,709
繰延税金資産小計	823,222	942,511
評価性引当額	△148,918	△146,270
繰延税金資産合計	674,304	796,241

(繰延税金負債)

	前連結会計年度 (2017年12月31日)	当連結会計年度 (2018年12月31日)
固定資産圧縮積立金	23,311千円	22,164千円
その他有価証券評価差額金	390,370	202,831
退職給付に係る資産	—	89,882
その他	16,638	18,643
繰延税金負債合計	430,320	333,521
繰延税金資産の純額	243,984	462,720

(注) 前連結会計年度及び当連結会計年度における繰延税金資産の純額は、連結貸借対照表の以下の項目に含まれております。

	前連結会計年度 (2017年12月31日)	当連結会計年度 (2018年12月31日)
流動資産—繰延税金資産	281,249千円	278,825千円
固定資産—繰延税金資産	—	183,894
固定負債—繰延税金負債	37,265	—

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との差異の原因となった主な項目別の内訳

前連結会計年度及び当連結会計年度は、法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間の差異が法定実効税率の100分の5以下であるため注記を省略しております。

(資産除去債務関係)

金額的重要性が乏しいため、記載を省略しております。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1. 報告セグメントの概要

当社グループの報告セグメントは、当社の構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、取締役会が、経営資源の配分の決定および業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものであります。

当社グループは取扱製品の性質や事業内容の位置付け等を考慮した上で、「計測機器」、「コンサルティング」の2つを報告セグメントとしております。「計測機器」では、当社製品のセンサおよび測定器等の製造・販売および修理・保守業務を行なっております。「コンサルティング」では、当社製品の設置、測定および解析等の役務の提供を行なっております。

2. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理の方法は、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」における記載と概ね同一であります。

3. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額に関する情報

前連結会計年度(自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)

(単位：千円)

	報告セグメント			調整額	連結財務諸表 計上額
	計測機器	コンサル ティング	計		
売上高					
外部顧客への売上高	14,210,205	1,140,560	15,350,765	—	15,350,765
セグメント間の内部 売上高又は振替高	—	—	—	—	—
計	14,210,205	1,140,560	15,350,765	—	15,350,765
セグメント利益	5,231,305	393,649	5,624,955	—	5,624,955
セグメント資産	15,486,208	877,721	16,363,930	6,914,897	23,278,827
その他の項目					
減価償却費	622,566	3,343	625,910	80,262	706,172
有形固定資産及び 無形固定資産の増加額	274,235	6,089	280,325	104,294	384,619

(注) 1. セグメント利益の合計額は、連結損益計算書の売上総利益の金額と一致しております。

2. セグメント資産の調整額は、各報告セグメントに配分していない全社資産であり、その主なものは、当社の余資運用資金(現金及び預金)、および投資有価証券であります。

3. 有形固定資産および無形固定資産の増加額の調整額は、主に建物改修に関わる設備投資額であります。

当連結会計年度(自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)

(単位：千円)

	報告セグメント			調整額	連結財務諸表 計上額
	計測機器	コンサル テイング	計		
売上高					
外部顧客への売上高	14,768,098	1,222,881	15,990,979	—	15,990,979
セグメント間の内部 売上高又は振替高	—	—	—	—	—
計	14,768,098	1,222,881	15,990,979	—	15,990,979
セグメント利益	5,518,413	454,733	5,973,146	—	5,973,146
セグメント資産	14,859,657	1,020,751	15,880,408	7,442,288	23,322,696
その他の項目					
減価償却費	566,181	3,340	569,522	74,533	644,056
有形固定資産及び 無形固定資産の増加額	401,874	1,268	403,142	48,475	451,618

(注) 1. セグメント利益の合計額は、連結損益計算書の売上総利益の金額と一致しております。

2. セグメント資産の調整額は、各報告セグメントに配分していない全社資産であり、その主なものは、当社の余資運用資金(現金及び預金)、および投資有価証券であります。

3. 有形固定資産および無形固定資産の増加額の調整額は、主に社内設備に関わる設備投資額であります。

【関連情報】

前連結会計年度(自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)

1. 製品及びサービスごとの情報

セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

(単位：千円)

日本	アジア	欧州	アメリカ	その他の地域	合計
13,280,587	1,140,400	357,971	545,072	26,733	15,350,765

(注) 1. 売上高は顧客の所在地を基礎とし、国又は地域に分類しております。

2. 各区分に属する国又は地域の内訳は次のとおりです。

- (1) アジア・・・中国、韓国、台湾、東南アジア、インド等
- (2) 欧州・・・ドイツ、フランス等
- (3) アメリカ・・・アメリカ、カナダ、中南米
- (4) その他の地域・・・オーストラリア、アフリカ等

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えているため、記載を省略しております。

3. 主要な顧客ごとの情報

外部顧客への売上高のうち、連結損益計算書の売上高の10%以上を占める相手先がないため、記載を省略しております。

当連結会計年度(自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)

1. 製品及びサービスごとの情報

セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

(単位：千円)

日本	アジア	欧州	アメリカ	その他の地域	合計
14,043,236	1,126,764	384,022	418,847	18,109	15,990,979

(注) 1. 売上高は顧客の所在地を基礎とし、国又は地域に分類しております。

2. 各区分に属する国又は地域の内訳は次のとおりです。

(1) アジア・・・中国、韓国、台湾、東南アジア、インド等

(2) 欧州・・・ドイツ、フランス等

(3) アメリカ・・・アメリカ、カナダ、中南米

(4) その他の地域・・・オーストラリア、アフリカ等

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えているため、記載を省略しております。

3. 主要な顧客ごとの情報

外部顧客への売上高のうち、連結損益計算書の売上高の10%以上を占める相手先がないため、記載を省略しております。

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前連結会計年度(自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)

該当事項はありません。

当連結会計年度(自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)

該当事項はありません。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

前連結会計年度(自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)

該当事項はありません。

当連結会計年度(自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)

該当事項はありません。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

前連結会計年度(自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)

「計測機器」セグメントにおいて、当連結会計年度にタマヤ計測システム株式会社の株式を取得し、連結の範囲に含めております。当該事象による負ののれんの発生益の計上額は、当連結会計年度においては30,925千円でありませ

当連結会計年度(自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

前連結会計年度(自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)

該当事項はありません。

当連結会計年度(自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)

該当事項はありません。

(1株当たり情報)

区分	前連結会計年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当連結会計年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
1株当たり純資産額(円)	553.29	560.94
1株当たり当期純利益(円)	34.12	39.35
	なお、潜在株式調整後1株当たり 当期純利益金額については、潜在株 式が存在しないため記載しておりま せん。	
	同左	

(注) 1. 1株当たり当期純利益金額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。なお、「期中平均株式数」は、株式
給付信託口が所有する当社株式を控除しております。

	前連結会計年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当連結会計年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
親会社株主に帰属する当期純利益(千円)	952,795	1,101,067
普通株主に帰属しない金額(千円)	—	—
普通株式に係る親会社株主に帰属する 当期純利益(千円)	952,795	1,101,067
期中平均株式数(千株)	27,928	27,983

2. 1株当たり純資産額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当連結会計年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
純資産の部の合計額(千円)	15,574,746	15,590,920
純資産の部の合計額から控除する金額(千円)	76,398	79,907
(うち非支配株主持分(千円))	(76,398)	(79,907)
普通株式に係る期末の純資産額(千円)	15,498,347	15,511,012
1株当たり純資産額の算定に用いられた普通株式 の数(千株)	28,011	27,652

3. 株主資本において自己株式として計上されている信託に残存する自社の株式は、1株当たり当期純利益金額
の算定上、期中平均株式数の計算において控除する自己株式に含めており、また、1株当たり純資産額の算定
上、期末発行済株式総数から控除する自己株式数に含めております。

1株当たり当期純利益金額の算定上、控除した当該自己株式の期中平均株式数は前連結会計年度83,093株、
当連結会計年度0株であります。

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

⑤ 【連結附属明細表】

【借入金等明細表】

区分	当期末残高 (千円)	当期末残高 (千円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	1,450,000	1,350,000	0.624	—
1年以内に返済予定の長期借入金	303,717	490,200	0.988	—
1年以内に返済予定のリース債務	19,810	22,034	1.265	—
長期借入金(1年以内に返済予定のものを除く。)	942,800	452,600	0.531	2020年 ～2021年
リース債務(1年以内に返済予定のものを除く。)	34,891	51,802	1.265	2020年 ～2028年
その他有利子負債	—	—	—	—
計	2,751,218	2,366,636	—	—

- (注) 1 平均利率については、期末借入金残高に対する加重平均利率を記載しております。
 2 長期借入金およびリース債務(1年以内に返済予定のものを除く。)の連結決算日後5年以内における返済予定額は以下のとおりであります。

	1年超2年以内 (千円)	2年超3年以内 (千円)	3年超4年以内 (千円)	4年超5年以内 (千円)
長期借入金	240,200	212,400	—	—
リース債務	16,611	11,698	8,009	3,820

【資産除去債務明細表】

本明細表に記載すべき事項が連結財務諸表規則第15条の23に規定する注記事項として記載されており、また、当連結会計年度期首および当連結会計年度末における資産除去債務の金額が、当連結会計年度期首および当連結会計年度末における負債および純資産の合計金額の100分の1以下であるため、連結財務諸表規則第92条の2の規定により記載を省略しております。

(2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
売上高(千円)	4,478,090	8,141,871	11,328,297	15,990,979
税金等調整前四半期(当期)純利益金額(千円)	660,353	816,107	926,437	1,566,791
親会社株主に帰属する四半期(当期)純利益金額(千円)	466,089	580,477	655,576	1,101,067
1株当たり四半期(当期)純利益金額(円)	16.64	20.72	23.40	39.35

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益金額(円)	16.64	4.08	2.68	15.96

2 【財務諸表等】

(1) 【財務諸表】

① 【貸借対照表】

(単位：千円)

	前事業年度 (2017年12月31日)	当事業年度 (2018年12月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	3,898,683	3,999,557
受取手形	※2 1,181,245	※2 924,542
電子記録債権	※2 696,691	※2 1,067,772
売掛金	※1 3,770,917	※1 3,625,891
有価証券	—	500,000
商品及び製品	1,161,451	932,881
仕掛品	781,616	910,269
未成工事支出金	22,082	25,024
原材料及び貯蔵品	1,505,856	1,172,893
前渡金	※1 23,774	44,040
前払費用	38,083	43,961
未収入金	※1 199,684	※1 164,915
繰延税金資産	177,118	181,947
その他	1,558	1,088
貸倒引当金	△4,174	△600
流動資産合計	13,454,590	13,594,185
固定資産		
有形固定資産		
建物	2,478,828	2,305,234
構築物	100,981	94,814
機械及び装置	716,310	623,370
工具、器具及び備品	156,143	165,965
土地	684,112	684,112
建設仮勘定	77,807	132,629
その他	45,662	66,003
有形固定資産合計	4,259,845	4,072,130
無形固定資産		
電話加入権	3,446	3,446
ソフトウェア	93,472	61,928
その他	23,131	53,156
無形固定資産合計	120,049	118,530

(単位：千円)

	前事業年度 (2017年12月31日)	当事業年度 (2018年12月31日)
投資その他の資産		
投資有価証券	2,059,137	1,446,665
関係会社株式	288,951	272,594
出資金	10	-
関係会社出資金	50,000	50,000
関係会社長期貸付金	※1 90,000	※1 190,000
従業員に対する長期貸付金	12,025	5,771
差入保証金	99,529	99,998
前払年金費用	-	106,900
破産更生債権等	4,436	-
繰延税金資産	3,300	153,757
その他	2,200	-
貸倒引当金	△5,807	△19
投資その他の資産合計	2,603,781	2,325,669
固定資産合計	6,983,677	6,516,330
資産合計	20,438,268	20,110,515
負債の部		
流動負債		
支払手形	479,389	410,636
電子記録債務	539,103	475,859
買掛金	※1 880,819	※1 811,261
短期借入金	1,450,000	1,350,000
1年内返済予定の長期借入金	263,517	450,000
未払金	※1 21,865	※1 113,125
未払費用	※1 631,990	※1 632,573
未払法人税等	135,535	153,984
未払消費税等	175,799	212,186
前受金	298,764	277,042
預り金	228,527	238,414
賞与引当金	128,440	128,621
役員賞与引当金	15,000	30,000
設備関係支払手形	90,334	35,437
その他	19,524	21,589
流動負債合計	5,358,612	5,340,731
固定負債		
長期借入金	850,000	400,000
退職給付引当金	1,340,105	1,340,123
役員退職慰労引当金	69,576	91,240
執行役員退職慰労引当金	10,740	18,066
資産除去債務	12,896	13,153
その他	53,503	63,782
固定負債合計	2,336,822	1,926,366
負債合計	7,695,434	7,267,098

(単位：千円)

	前事業年度 (2017年12月31日)	当事業年度 (2018年12月31日)
純資産の部		
株主資本		
資本金	1,723,992	1,723,992
資本剰余金		
資本準備金	1,759,161	1,759,161
その他資本剰余金	94,919	94,919
資本剰余金合計	1,854,080	1,854,080
利益剰余金		
利益準備金	327,360	327,360
その他利益剰余金		
買換資産圧縮積立金	52,792	50,220
別途積立金	6,642,000	7,242,000
繰越利益剰余金	1,272,301	1,344,741
利益剰余金合計	8,294,453	8,964,321
自己株式	△14,209	△158,559
株主資本合計	11,858,317	12,383,834
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	884,515	459,582
評価・換算差額等合計	884,515	459,582
純資産合計	12,742,833	12,843,417
負債純資産合計	20,438,268	20,110,515

② 【損益計算書】

(単位：千円)

	前事業年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当事業年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
売上高	※1,3 14,550,042	※1,3 14,980,980
売上原価	※1,3 10,303,175	※1,3 10,522,530
売上総利益	4,246,867	4,458,450
販売費及び一般管理費	※1,2 3,591,150	※1,2 3,628,515
営業利益	655,716	829,935
営業外収益		
受取利息及び配当金	※1 467,245	※1 326,358
その他	※1 161,641	※1 167,091
営業外収益合計	628,886	493,450
営業外費用		
支払利息	19,089	16,986
その他	65,916	89,666
営業外費用合計	85,005	106,653
経常利益	1,199,597	1,216,732
特別損失		
関係会社株式評価損	18,697	—
特別損失合計	18,697	—
税引前当期純利益	1,180,900	1,216,732
法人税、住民税及び事業税	205,250	234,500
法人税等調整額	59,067	32,252
法人税等合計	264,317	266,753
当期純利益	916,583	949,978

③【株主資本等変動計算書】

前事業年度(自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)

(単位：千円)

	株主資本			
	資本金	資本剰余金		
		資本準備金	その他資本剰余金	資本剰余金合計
当期首残高	1,723,992	1,759,161	94,919	1,854,080
当期変動額				
買換資産圧縮積立金の取崩				
別途積立金の積立				
剰余金の配当				
当期純利益				
自己株式の取得				
自己株式の処分				
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)				
当期変動額合計	—	—	—	—
当期末残高	1,723,992	1,759,161	94,919	1,854,080

	株主資本				
	利益準備金	利益剰余金			利益剰余金合計
		その他利益剰余金			
		買換資産圧縮積立金	別途積立金	繰越利益剰余金	
当期首残高	327,360	55,499	6,142,000	1,133,122	7,657,981
当期変動額					
買換資産圧縮積立金の取崩		△2,707		2,707	—
別途積立金の積立			500,000	△500,000	—
剰余金の配当				△280,111	△280,111
当期純利益				916,583	916,583
自己株式の取得					
自己株式の処分					
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)					
当期変動額合計	—	△2,707	500,000	139,178	636,471
当期末残高	327,360	52,792	6,642,000	1,272,301	8,294,453

(単位：千円)

	株主資本		評価・換算差額等		純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券評価差額金	評価・換算差額等合計	
当期首残高	△105,328	11,130,726	363,963	363,963	11,494,689
当期変動額					
買換資産圧縮積立金の取崩		—			—
別途積立金の積立		—			—
剰余金の配当		△280,111			△280,111
当期純利益		916,583			916,583
自己株式の取得	△25	△25			△25
自己株式の処分	91,144	91,144			91,144
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）			520,552	520,552	520,552
当期変動額合計	91,119	727,591	520,552	520,552	1,248,143
当期末残高	△14,209	11,858,317	884,515	884,515	12,742,833

当事業年度(自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)

(単位：千円)

	株主資本			
	資本金	資本剰余金		
		資本準備金	その他資本剰余金	資本剰余金合計
当期首残高	1,723,992	1,759,161	94,919	1,854,080
当期変動額				
買換資産圧縮積立金の取崩				
別途積立金の積立				
剰余金の配当				
当期純利益				
自己株式の取得				
自己株式の処分				
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)				
当期変動額合計	—	—	—	—
当期末残高	1,723,992	1,759,161	94,919	1,854,080

	株主資本				
	利益剰余金				
	利益準備金	その他利益剰余金			利益剰余金合計
買換資産圧縮積立金		別途積立金	繰越利益剰余金		
当期首残高	327,360	52,792	6,642,000	1,272,301	8,294,453
当期変動額					
買換資産圧縮積立金の取崩		△2,571		2,571	—
別途積立金の積立			600,000	△600,000	—
剰余金の配当				△280,111	△280,111
当期純利益				949,978	949,978
自己株式の取得					
自己株式の処分					
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)					
当期変動額合計	—	△2,571	600,000	72,439	669,867
当期末残高	327,360	50,220	7,242,000	1,344,741	8,964,321

(単位：千円)

	株主資本		評価・換算差額等		純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券評価差額金	評価・換算差額等合計	
当期首残高	△14,209	11,858,317	884,515	884,515	12,742,833
当期変動額					
買換資産圧縮積立金の取崩		—			—
別途積立金の積立		—			—
剰余金の配当		△280,111			△280,111
当期純利益		949,978			949,978
自己株式の取得	△144,350	△144,350			△144,350
自己株式の処分		—			—
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）			△424,932	△424,932	△424,932
当期変動額合計	△144,350	525,517	△424,932	△424,932	100,584
当期末残高	△158,559	12,383,834	459,582	459,582	12,843,417

【注記事項】

(重要な会計方針)

- 1 有価証券の評価基準及び評価方法
 - (1) 子会社株式
移動平均法による原価法
 - (2) その他有価証券
時価のあるもの
決算日の市場価格等に基づく時価法(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)
時価のないもの
移動平均法による原価法
- 2 たな卸資産の評価基準及び評価方法
移動平均法による原価法(収益性の低下による簿価切下げの方法)
- 3 固定資産の減価償却の方法
 - (1) 有形固定資産(リース資産を除く)
定率法
ただし、1998年4月1日以降に取得した建物(建物附属設備を除く)並びに2016年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物については、定額法を採用しております。なお、耐用年数および残存価額については、法人税法に規定する方法と同一の基準によっております。
 - (2) 無形固定資産(リース資産を除く)
定額法
ただし、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間(5年)に基づく定額法によっております。
 - (3) リース資産
所有権移転外ファイナンス・リースに係るリース資産
リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。
- 4 引当金の計上基準
 - (1) 貸倒引当金
債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。
 - (2) 賞与引当金
従業員に対して支給する賞与に充てるため、支給見込額により計上しております。
 - (3) 役員賞与引当金
役員に対して支給する賞与に充てるため、支給見込額に基づき計上しております。
 - (4) 退職給付引当金
従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務および年金資産の見込額に基づき計上しております。
過去勤務費用は、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(10年)による定額法により費用処理しております。
数理計算上の差異は、各事業年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(10年)による定額法により按分した金額を、それぞれ発生の翌事業年度から費用処理することとしております。
 - (5) 執行役員退職慰労引当金
執行役員に対する退職慰労金の支出に備えるため、内規に基づく事業年度末要支給額を計上しております。
 - (6) 役員退職慰労引当金
役員に対する退職慰労金の支出に備えるため、内規に基づく事業年度末要支給額を計上しております。
- 5 収益及び費用の計上基準
完成工事高及び完成工事原価の計上基準
当事業年度末までの進捗部分について成果の確実性が認められる工事については工事進行基準(工事の進捗率の見積りは原価比例法)を、その他の工事については工事完成基準を適用しております。
- 6 退職給付に係る会計処理
退職給付に係る未認識数理計算上の差異及び未認識過去勤務費用の会計処理の方法は、連結財務諸表におけるこれらの会計処理の方法と異なっております。

7 ヘッジ会計の方法

(1) ヘッジ会計の方法

金利スワップについては、特例処理の要件を満たしているため、特例処理を採用しております。

(2) ヘッジ手段とヘッジ対象

ヘッジ手段…金利スワップ

ヘッジ対象…借入金の利息

(3) ヘッジ方針

金利変動による借入債務の金利負担増大の可能性を減殺するために行っております。

(4) ヘッジ有効性評価の方法

ヘッジ有効性評価については、明らかに高い有効性が認められるため評価を省略しております。

8 消費税及び地方消費税の会計処理

消費税等の会計処理は、税抜方式によっております。

(貸借対照表関係)

※1 関係会社に対するものが、次のとおり含まれております。

	前事業年度 (2017年12月31日)	当事業年度 (2018年12月31日)
短期金銭債権	414,218千円	289,377千円
長期金銭債権	90,000	190,000
短期金銭債務	700,125	611,631

※2 期末日満期手形および電子記録債権の会計処理は、手形交換日をもって決済処理しております。

なお、決算期末日は、金融機関の休業日のため期末日満期手形及び電子記録債権の金額が下記のとおり含まれております。

	前事業年度 (2017年12月31日)	当事業年度 (2018年12月31日)
受取手形	156,354千円	95,356千円
電子記録債権	4,598	23,427

3 当社は、資金調達の効率化および安定化をはかるため取引銀行5行と特定融資枠(コミットメントライン)契約を締結しております。

当事業年度における特定融資枠契約に係る借入金未実行残高等は次のとおりであります。

	前事業年度 (2017年12月31日)	当事業年度 (2018年12月31日)
特定融資枠契約の総額	1,750,000千円	1,750,000千円
当事業年度末借入残高	—	—
当事業年度末未使用残高	1,750,000	1,750,000

(損益計算書関係)

※1 関係会社との取引に係るものが次のとおり含まれております。

	前事業年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当事業年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
売上高	777,293千円	606,718千円
仕入高	5,926,814	5,651,518
販売費及び一般管理費	27,016	25,393
営業取引以外の取引高	544,073	400,365

※2 販売費及び一般管理費の主要な費目及び金額は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当事業年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
給与手当	1,131,572千円	1,152,406千円
従業員賞与	347,356	377,746
賞与引当金繰入額	56,211	58,319
役員賞与引当金繰入額	15,000	30,000
退職給付費用	78,880	70,494
役員退職慰労引当金繰入額	27,461	21,663
執行役員退職慰労引当金繰入額	6,690	7,326
減価償却費	71,574	65,903
貸倒引当金繰入額	6,398	—

おおよその割合

販売費	56%	53%
一般管理費	44	47

※3 当期の完成工事高は994,634千円(前期692,521千円)であり、完成工事原価は928,877千円(前期619,936千円)であります。

(有価証券関係)

前事業年度(2017年12月31日)

子会社株式で時価のあるものはありません。なお、時価を把握することが極めて困難と認められる子会社株式は以下のとおりであります。

子会社株式

区分	貸借対照表計上額 (千円)
(1)子会社株式	288,951

(注)上記については、市場価格がありません。したがって、時価を把握することが極めて困難と認められるものであります。

当事業年度(2018年12月31日)

子会社株式で時価のあるものはありません。なお、時価を把握することが極めて困難と認められる子会社株式は以下のとおりであります。

子会社株式

区分	貸借対照表計上額 (千円)
(1)子会社株式	272,594

(注)上記については、市場価格がありません。したがって、時価を把握することが極めて困難と認められるものであります。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

(繰延税金資産)

	前事業年度 (2017年12月31日)	当事業年度 (2018年12月31日)
未払事業税等	13,285千円	16,574千円
賞与引当金	39,636	39,383
たな卸資産評価減	109,416	105,980
退職給付引当金	410,922	410,345
役員退職慰労引当金	24,592	33,469
投資有価証券評価損	80,709	74,984
その他	31,910	28,661
繰延税金資産小計	710,474	709,400
評価性引当額	△115,893	△115,514
繰延税金資産合計	594,580	593,885

(繰延税金負債)

	前事業年度 (2017年12月31日)	当事業年度 (2018年12月31日)
固定資産圧縮積立金	23,311千円	22,164千円
その他有価証券評価差額金	390,370	202,831
前払年金費用	—	32,733
その他	479	451
繰延税金負債合計	414,161	258,180
繰延税金資産の純額	180,418	335,705

(注) 前事業年度及び当事業年度における繰延税金資産の純額は、貸借対照表の以下の項目に含まれております。

	前事業年度 (2017年12月31日)	当事業年度 (2018年12月31日)
流動資産－繰延税金資産	177,118千円	181,947千円
固定資産－繰延税金資産	3,300	153,757

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との差異の原因となった主な項目別の内訳

	前事業年度 (2017年12月31日)	当事業年度 (2018年12月31日)
法定実効税率	30.9%	30.9%
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	1.6	1.1
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	△11.0	△7.2
税額控除	△3.3	△4.6
住民税均等割	1.4	1.3
その他	2.8	0.4
税効果会計適用後の法人税等の負担率	22.4	21.9

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

④ 【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

資産の種類	当期首残高 (千円)	当期増加額 (千円)	当期減少額 (千円)	当期償却額 (千円)	当期末残高 (千円)	減価償却 累計額 (千円)
有形固定資産						
建物	2,478,828	7,898	—	181,491	2,305,234	3,142,996
構築物	100,981	6,597	—	12,764	94,814	178,405
機械及び装置	716,310	141,296	—	234,236	623,370	2,505,544
工具、器具及び備品	156,143	103,236	189	93,224	165,965	1,090,199
土地	684,112	—	—	—	684,112	—
建設仮勘定	77,807	123,104	68,281	—	132,629	—
その他	45,662	41,865	—	21,524	66,003	119,007
有形固定資産計	4,259,845	423,997	68,470	543,241	4,072,130	7,036,153
無形固定資産						
電話加入権	3,446	—	—	—	3,446	—
ソフトウェア	93,472	8,736	—	40,280	61,928	—
その他	23,131	35,639	3,807	1,807	53,156	—
無形固定資産計	120,049	44,376	3,807	42,087	118,530	—

- (注) 1. 機械及び装置の当期増加額のうち主なものは、大型校正装置の取得 78,192千円であります。
2. 工具、器具及び備品の当期増加額のうち主なものは、試験・生産設備等の取得 43,240千円であります。
3. 建設仮勘定の当期増加額のうち主なものは、試験・生産設備等の取得 108,544千円であります。
また、当期減少額のうち主なものは、新ゲージ棟関連設備の完成による振替 50,741千円であります。
4. 有形固定資産その他の当期増加額のうち主なものは、電話交換機のリース 25,800千円であります。

【引当金明細表】

区分	当期首残高 (千円)	当期増加額 (千円)	当期減少額 (千円)	当期末残高 (千円)
貸倒引当金	9,982	619	9,982	619
賞与引当金	128,440	128,621	128,440	128,621
役員賞与引当金	15,000	30,000	15,000	30,000
役員退職慰労引当金	69,576	21,663	—	91,240
執行役員退職慰労引当金	10,740	7,326	—	18,066

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【その他】

該当事項はありません。

第6 【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	1月1日から12月31日まで
定時株主総会	3月中
基準日	12月31日
剰余金の配当の基準日	12月31日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り	
取扱場所	(特別口座) 東京都中央区八重洲1丁目2番1号 みずほ信託銀行株式会社 本店証券代行部
株主名簿管理人	(特別口座) 東京都中央区八重洲1丁目2番1号 みずほ信託銀行株式会社
取次所	—
買取手数料	株式の売買の委託に係る手数料相当額として別途定める金額
公告掲載方法	電子公告とする。ただし、事故その他のやむを得ない事由により電子公告をすることができないときは、日本経済新聞に掲載する。 公告掲載URL http://www.kyowa-ei.com/
株主に対する特典	なし

第7 【提出会社の参考情報】

1 【提出会社の親会社等の情報】

当社は、金融商品取引法第24条の7第1項に規定する親会社等はありません。

2 【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

(1) 有価証券報告書およびその添付書類並びに確認書

事業年度(第71期)(自 2017年1月1日 至 2017年12月31日) 2018年3月29日関東財務局長に提出。

(2) 内部統制報告書およびその添付書類

事業年度(第71期)(自 2017年1月1日 至 2017年12月31日) 2018年3月29日関東財務局長に提出。

(3) 四半期報告書および確認書

第72期第1四半期(自 2018年1月1日 至 2018年3月31日) 2018年5月14日関東財務局長に提出。

第72期第2四半期(自 2018年4月1日 至 2018年6月30日) 2018年8月10日関東財務局長に提出。

第72期第3四半期(自 2018年7月1日 至 2018年9月30日) 2018年11月13日関東財務局長に提出。

(4) 臨時報告書

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2(株主総会における議決権行使の結果)の規定に基づく
臨時報告書

2018年4月5日関東財務局長に提出。

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号(代表取締役の異動)の規定に基づく臨時報告書

2019年2月19日関東財務局長に提出。

(5) 自己株券買付状況報告書

報告期間(自 2018年12月17日 至 2018年12月31日) 2019年1月15日関東財務局長に提出。

第二部 【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

2019年3月28日

株式会社共和電業
取締役会 御中

EY新日本有限責任監査法人

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 野 本 博 之 ㊞

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 飯 畑 史 朗 ㊞

<財務諸表監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社共和電業の2018年1月1日から2018年12月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社共和電業及び連結子会社の2018年12月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

<内部統制監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、株式会社共和電業の2018年12月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

内部統制報告書に対する経営者の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した内部統制監査に基づいて、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき内部統制監査を実施することを求めている。

内部統制監査においては、内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための手続が実施される。内部統制監査の監査手続は、当監査法人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。また、内部統制監査には、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、株式会社共和電業が2018年12月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

-
- (注) 1 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社が連結財務諸表に添付する形で別途保管しております。
2 XBRLデータは監査の対象に含まれていません。

独立監査人の監査報告書

2019年3月28日

株式会社共和電業
取締役会 御中

EY新日本有限責任監査法人

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 野 本 博 之 ㊞

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 飯 畑 史 朗 ㊞

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社共和電業の2018年1月1日から2018年12月31日までの第72期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社共和電業の2018年12月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

-
- (注) 1 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社が財務諸表に添付する形で別途保管しております。
2 XBRLデータは監査の対象に含まれていません。

【表紙】

【提出書類】 内部統制報告書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条の4の4第1項

【提出先】 関東財務局長

【提出日】 2019年3月28日

【会社名】 株式会社共和電業

【英訳名】 KYOWA ELECTRONIC INSTRUMENTS CO., LTD.

【代表者の役職氏名】 代表取締役社長執行役員 田 中 義 一

【最高財務責任者の役職氏名】 該当事項はありません。

【本店の所在の場所】 東京都調布市調布ヶ丘3丁目5番地1

【縦覧に供する場所】 株式会社東京証券取引所
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)

1 【財務報告に係る内部統制の基本的枠組みに関する事項】

代表取締役社長執行役員田中義一は、当社及び連結子会社(以下、「当社グループ」)の財務報告に係る内部統制の整備及び運用に責任を有しており、企業会計審議会の公表した「財務報告に係る内部統制の評価及び監査の基準並びに財務報告に係る内部統制の評価及び監査に関する実施基準の設定について(意見書)」に示されている内部統制の基本的枠組みに準拠して財務報告に係る内部統制を整備及び運用しております。

なお、内部統制は、内部統制の各基本的要素が有機的に結びつき、一体となって機能することで、その目的を合理的な範囲で達成しようとするものであります。このため、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性があります。

2 【評価の範囲、基準日及び評価手続に関する事項】

財務報告に係る内部統制の評価は、当事業年度の末日である2018年12月31日を基準日として行われており、評価に当たっては、一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠しました。

本評価においては、連結ベースでの財務報告全体に重要な影響を及ぼす内部統制(以下、「全社的な内部統制」)の評価を行った上で、その結果を踏まえて、評価対象とする業務プロセスを選定しております。当該業務プロセスの評価においては、選定された業務プロセスを分析した上で、財務報告の信頼性に重要な影響を及ぼす統制上の要点を識別し、当該統制上の要点について整備および運用状況を評価することによって、内部統制の有効性に関する評価を行いました。

財務報告に係る内部統制の評価の範囲は、当社グループについて、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性の観点から必要な範囲を決定しました。財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性は、金額的および質的影響の重要性を考慮して決定しており、当社および連結子会社3社を対象として行った全社的な内部統制の評価結果を踏まえ、業務プロセスに係る内部統制の評価範囲を合理的に決定しました。なお、その他の連結子会社7社については、金額的および質的重要性の観点から僅少であると判断し、全社的な内部統制の評価範囲に含めておりません。

業務プロセスに係る内部統制の評価範囲については、各事業拠点の前連結会計年度の売上高(連結会社間取引消去後)の金額が高い拠点から合算していき、前連結会計年度の連結売上高の概ね2/3に達している事業拠点を「重要な事業拠点」として選定しました。選定した重要な事業拠点においては、企業の事業目的に大きく関わる勘定科目として売上高、売掛金および棚卸資産に至る業務プロセスを評価の対象としました。さらに、選定した重要な事業拠点にかかわらず、それ以外の事業拠点をも含めた範囲について、重要な虚偽記載の発生可能性が高く、見積りや予測を伴う重要な勘定科目に係る業務プロセスやリスクの大きい取引を行っている事業又は業務に係る業務プロセスを財務報告への影響を勘案して重要性の大きい業務プロセスとして評価対象に追加しております。

3 【評価結果に関する事項】

上記の評価の結果、当事業年度末日時点において、当社グループの財務報告に係る内部統制は有効であると判断しました。

4 【付記事項】

該当事項はありません。

5 【特記事項】

該当事項はありません。

【表紙】

【提出書類】 確認書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条の4の2第1項

【提出先】 関東財務局長

【提出日】 2019年3月28日

【会社名】 株式会社共和電業

【英訳名】 KYOWA ELECTRONIC INSTRUMENTS CO., LTD.

【代表者の役職氏名】 代表取締役社長執行役員 田 中 義 一

【最高財務責任者の役職氏名】 該当事項はありません。

【本店の所在の場所】 東京都調布市調布ヶ丘3丁目5番地1

【縦覧に供する場所】 株式会社東京証券取引所
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)

1 【有価証券報告書の記載内容の適正性に関する事項】

当社代表取締役社長執行役員田中義一は、当社の第72期(自2018年1月1日 至2018年12月31日)の有価証券報告書の記載内容が金融商品取引法令に基づき適正に記載されていることを確認いたしました。

2 【特記事項】

確認に当たり、特記すべき事項はありません。